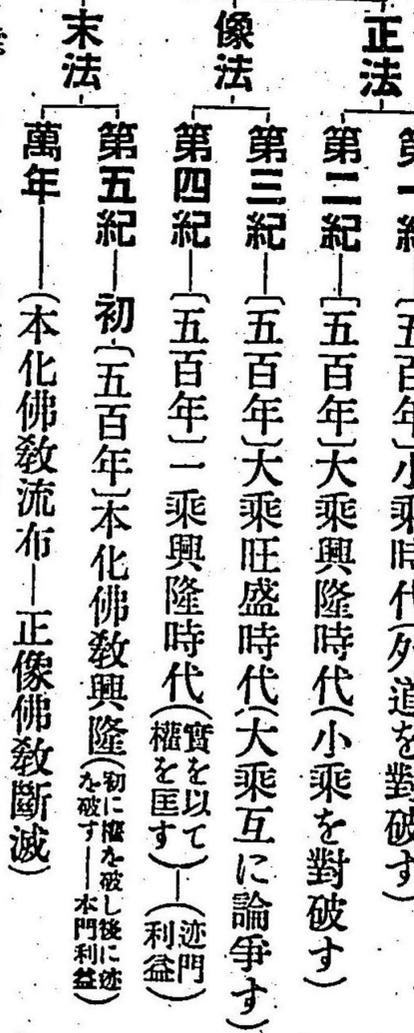


【教法の興廢】 初め小乗が昌え、後に權大乘、次に實大乘、最後に權大乘、後のが興ること。

世あがれば教劣り世降れば教優る病輕ければ藥劣り病重ければ藥勝るの謂なり

百歳、その一紀の變替に應じて、教法の興廢がこれに伴なつて淺より深に、粗より精に至るべく經過して來たのである。

教法 傳布



要するに、古いほど良い時代で、新しいほど悪い時代である、而してこれに應じて時代の救済となる教法は、良い時代ほど淺い劣等の教法で、悪い時ほど深い優等の教法が弘ツた、佛もさういふように命令なされてあるし、事實もその通り行ッて居る、世間で

九乘小乘劣乘勝乘緣に應じて出沒す古に拙なるにあらす今に巧なるにあらす

動すると『佛教も幾多の時世を歴て段々と勝れたものに仕上げられた』といふが、爾でない、後世の發明推理がどの位進歩しても、決して大昔の佛教ほどの進歩は出來ない、これは一つものが段々勝れるように變化したのでなくて、始めから劣ツたのや勝れたのが、幾らもあつて、その中から一々の時世にあて箝するように、此時代には此教法と、ちゃんと役割が究められてあつたのである、それで時代が悪くなり行くほど、勝れた教法が顯れる順序になつて居るのは、病が進むから藥が進んだので、輕病には淺藥、重病には良藥といふ順序である。

かくして『正像末の三時』『五個の五百歳』と、正面からも断面からも、手を盡して觀察するのは、畢竟何の爲かといふに、すべて時代の研究といふものは、その目的が過去に在るのでなくて、

吾人は未來を洞知せんが爲に過去を知るを要す

現在及び將來に存して居るのである、所謂「故きを温ねて新しきを知る」の趣意で、所詮は『末法』を研究するに在る、「三時」「五紀」を分別するのも、畢竟それが爲である。

其三 佛識時代ノ末法

「末法」は極々悪い時である、悪い時であるから教法は極勝れたものでなければならぬ、これまでの教法は、これまでの時代を益したので、過去に益があつても現代に用を爲さぬ、それを強て用ゐようとするから、却て弊害を多くするのである、「時惡」が「教善」に打ち勝つたのである、その時惡にまける教法では、この惡世は救へない、それといふのも、「正法」「像法」の二時代に弘まツた教は、元來「機を標準として説かれた權教」であるから、機の回轉と共に効用を失して時惡にまけたのである、「佛智を起點として説

【時惡】 時代の惡化力。

【善善】 教法の善化力。

時機に超脱して能く時機に應ず

【皮相の救】 表面のみ佛法に依つて善をすしめる上つに見えても衆生の根本精神に何等の力を與へ居らざる事。

き顯はされた實教』は、機から眞理に赴くのでなく、直ちに眞理から機を攝して行くのであるから、機の回轉消長(即ち時)の爲に動搖されない、「機」にも「時」にも超脱して居て能く時も機も照すから、この實教でなければ末法重濁の時代を救ふことは斷じて出来ないのである。

それから時代にまける教法では、設し時の弊惡の幾分を救ひ得ても、それはホンの皮相の救ひであつて、消極的に一時を防止するに過ぎないから、却て程經て猛烈な反動を起して、先より惡くなることがある、畢竟權教には「萬法開顯」といふ積極的消化力を有つて居ないからである、末法が極惡いといふものゝ、一面には極めて悪いものに、却て多くの長所が潜んで居る道理だから、この極惡重濁の時代は、裏面に大なる進歩を有して居る、之を開顯

【大惡】 時代の大惡化力によりて釀成せる五逆斷法等の極惡。

【大善】 一切善法の根元たる法華經の大善化力。

未法は最上の良時代なり

【時應】 時に應じて教を開くべき順序的規律。

し調和する力のある妙法で化導したならば、大惡却て大善となる、それが教の妙といふものである、故に「未法」が悪いといふことは「教」を離して、「時」ばかりで謂ふ事であつて、若し應時の教化を乗けて言へば、實は最上の良き時代となるのである。  
未法は過時の權迹教ではとても救へぬ時、萬法開顯の妙法の自然顯るべき時、三段の變化で最極度に退化せる時惡旺盛の運で、モ一これより悪くはなりようがないから、前の正像が各千年づゝであるに比して、未法の年代は一萬年とある、甚だ長い様ではあるが、その幾變遷を類同して、一潮勢の運命と定められた點に着目して見なければならぬ、たゞその中で教法の時應から論じて、佛識時代の未法(最初の五百年)佛識已後の未法(入末五百年以後)の二分界が出来て、一方は過渡時代の未法、一方は居据りの未法

といふ工合に區別が立つ、この區別は非常に大切な義意を含んで居るから、大にその分界を味はねばならぬ。

未法に入つて初めの五百年、『大集經』に滅後の變遷を豫言して、未法時代だけは、初めの五百年を擧げたのみである、これは塔中別付の大法に關係せざる普通佛敎の變遷を敘するのが主意であつて、時善の鎖磨を歴證したのであるから、「白法隱沒」ぎりて、他

を言はないのである、而してこの五箇の五百歳の中、特に「第五の五百歳」に就ては、法華經に來ると、『法華の正法が流布して、専ら時代の唯一救濟となる』と豫言してある、これは通常佛敎の白法が隱沒したから、高等佛敎たる最深秘の妙法が、これに代つて根底から教法を組直し、時代を叩き直して、本時の娑婆に還元するといふ方から觀察した「第五の五百歳」である、即ち佛識に兩

【時善】 時代の善化力、それが段々と消失せて行くを時善の鎖磨といふ。

重ありて、『時悪』と『教善』との兩様が遺憾なく明記せられたのである。

末法初期の佛識

「時悪の方面 白法隱没(大集經の豫言) 救濟の方面 妙法流布(法華經の豫言)」

一方には『白法隱没』とあり、一方には『妙法流布』とある、されど決して矛盾ではない、兩面を悉した觀察である、さて正像傳來の白法は隱没した、これに代るべき救濟が發現しなければ、世は永く常闇である、『時悪』の恐しさは、佛敎家そのものが、第一に佛敎を破壊したのである、諸宗の見我妄計が、佛敎の正意を滅して、世間の罪惡より以上の惡源となつたのである、空海の『第二藏論』や、慈覺の『理同事勝』や、法然の『捨閉閣地』や、禪宗の『教外別傳』や、眞宗の『肉食妻帯』や、いづれも悪い了簡て始めたのでは

【正像傳來】 正法千年 像法千年の時代に流傳弘布 される教法。

佛敎家先づみ づから佛敎を 亡さんとす

【魔作沙門】 魔が出家 に作りて佛法を内からつぶ るといふこと「法滅盡經」の 語なり。

危○哉○若○し○本○化○の○明○ 斷○れ○を○指○摘○す○る○こ ○と○無○か○り○せ○ば○人○は○邪 ○教○を○信○じ○佛○は○妄○語○の ○訛○を受○く○べし

なく、結構世を救はうといふ殊勝な考から起つたのであらうが、そこが時悪の毒化作用で、知らず識らず『魔作沙門壞亂正法』の豫言に違はず、『佛弟子能く佛法を壞る』の明鑑に漏れず、惡鬼その身に入つて佛敎の正意を亡ひ、八重に亂れて一時に毒氣を勃發したのが、入末の少し前あたりから、此『佛敎の都』たる日本國に、一時に落込んで来て、みんごと佛弟子の名と形の下に、佛法は破壊されて了つた、誠や『白法隱没』と佛の豫言なされたことは、露ほども相違しないのであるが、若しも本化の明斷がこれを指摘することが無かつたならば、吾人も今猶彼の諸宗どもを、やはり佛の正法と信じて居るやも知れぬ、さうなると『大集經』の豫言は偽になる、これが反古ならば、一方の『法華經』の豫言も相手がなくなつて、やはり反古になる、さうなると『佛法を信ずれば救はれ

發すべきの毒  
は既に發した  
大手術を待  
つのみ

る』といふことも反古になる。佛の尊いといふことも、佛意の深  
いといふことも、みな反古になる。全體佛敎そのものが反古にな  
る、すべての宗旨が、世人の謂ふように、どれも皆佛の正法だと  
いふならば、末法は正法の最も多い時で、『白法繁昌』と言はねば  
ならぬ事になる、畢竟するに「時」の研究が不行届であるから、そ  
んな算當の合はない迷見に陥るのである。  
天地が覆へるとも、佛の金言は寸毫も相違しない、正しく白法  
隱没して邪法の昌え機勢だ末法の初期、「出るだけの毒はすツかり  
發した時、もしこの上は大手術の治療を施すより外はないといふ  
時、正しくその治療者たり且つ裁決者たる釋尊の使者が、法華經  
の時應的全盛時代の眞最中(末法に入て、百七十二年日)に出現し  
て、『大集經』の明文の通り、『白法隱没』の宣告を下し、法華經の

三國二千年に  
於ける歴史的  
大事實

明文の通り「妙法開宣」の事實を聞いた、乃ち佛敎に於ては、三國、  
二千年に亘る歴史的的大事實である、滅後佛敎の一新紀元を開いた  
のである、思想界の最大回轉として、眞に人類の大事件である、  
かういふ最大事の關節であるから、何事を置ても、『末法の初』の  
五百年は、豫言せずには置かれぬ、亡くなるものは亡くなる、  
顯れるものは顯れるといふのだから、この上の詮索は要らない、  
物がなくなれば話もなくなるから、所謂「この下に話なし」の轍で、  
こゝまでの豫言で盡きて居る、それと共に新舞臺は交換的に現れ  
て来る、新に顯れたものは、その物の初めだが、前の物からいへ  
ば終りになる、この『前の終りにして後の始めなる交叉點』まで豫  
言して置けば、それで案内の役は済む、あとは宜しく實物で承知  
するが可いといふまでのものである、果して吾々はモ一その實境

【實境中】事實その境界  
の中の意。

中に這入ッて居るのである。  
『普通佛教の終極』、『特別佛教の建設』、この二大事件の焼點となつた「第五の五百歳」は、一面は「滅亡史」で、一面は「興立史」である、本化の大法が、これより萬年の全末法期を救ふべき大建設を爲した時代である。

其四 佛讖已後ノ末法

同じ「末法」でも實は讖後の末法が、寧ろ末法時應教の本舞臺である、建設中には順序があるが、建設後は纏めて應用することが出来る、『佐渡前』も『佐渡後』も要らない、平推しに推して行けば可い、時代は『末法の一器』である、教法は『唯一佛乘の一水』である、細い變化はあつても、すべて「末法」といふ大きなウネリの小波瀾に過ぎないのである、時代の一大惡を教法の一大善に化して、

【佐渡前】「日蓮聖人」の佐渡へ流され給ふ迄には、未だ眞實義を述べず佛の御前經の如しと自ら「三淨妙」に仰あり。  
【佐渡後】佐渡島より始めて眞實を現はすと仰せあるゆゑ佐渡以後を已眞實とするなり。

末法の時應として佛自ら法華經を留めたまふ未法の時感として時代づから法華主義を待つ弘めざらんや法華經信せざらんや法華經

正像時代よりも佛在世よりも、宓犧、神農、堯、舜の時代よりも、迥かに勝れた良時代に轉るのである、この轉ずる力を備へて居る教法が、即ちこの末法救護の憲教なのである、その教法を要求しつゝあるのが、即ち『末法の時感』である。  
實例から一つ言て見ると、『人權平等』とか『自由』とかいふ事は悪いこととてなくて良いことである、けれどもこれは世が悪かつたから發生した思想及法理である、神武天皇や堯舜のような聖王が善政を布いて居る時は、人權の自由のといふことを求める必要がない、爲政者が手前勝手の暴政を施して、民を苦しめるといふことに因で、民もこれに反抗する思想が起つて、遂に人權の平等を説き、天賦の自由を喚ぶ様になつたのである、人て治める政治から、法て治める政治に轉じたのは、畢竟時惡の進歩から來たので、

法の以て治めるは器  
械的なり人を以て治  
めるは有機的なり只  
天に代る人を要す是  
れ間世の偉人なり常  
に得がたし故に代ふ  
るに法を以てす然れ  
ども日本國は人以上  
法以上の政體あり道  
義建國の皇猷これ也

實は天下を治めるのは、法律で治めるよりは、人て治める方が本當であつて、その方が進歩した治め方であるのだが、人そのものに私が多くなつて来て、大に劍呑なところから、安心のために、法律で約束するのである、獨裁政治が憲法政治になつたのを進歩だとのみ心得て居るのは、半面ばかり觀た僻見である、『どうして人も人は偽りをいふもの』と極つて、始めて人が恃みにならなくなるので、少しも偽らない神のような佛のような人があるなら、それに依つて治めて貰うくらゐ、安樂な高尚な清潔な進歩した政治はないのである、ところが世が末になると上は下を虐げ、下は上を欺くような光景が、彼方にも此方にもと現出して、所謂『上下とも利を征て而して國危し』といふ風になつて来たから、世間に騒動が絶えない、そこで是れではならぬと、平等主義を振りま

はして、上下同治の方法を建てた、暴君汚吏を排斥して信じないと同じく、人民も矢張信じられない、『どちらも危険であるから、萬事は約束で』といふ處より、法律が人に代つて『法治主義』と變じた、人本位から法本位に變じたのは可いが、その法律なるものは、そもく誰が作るのかといふと、矢張その『あてにならぬ所の人』が造るのである、危険の度は依然失せない、こゝに於ては、天にも地にも唯一つの頼みとする『法律』そのものが、若しも不正確であつたらば、それこそ暴君汚吏の害よりも甚しい、『前門に虎を拒いで後門に狼を進めた』ような事になつて了う、故に一たび法治主義に變じたら、今度は『その法の根底に最も正しい要素を容れて』その缺點を補はねばならぬ、『萬法開顯の妙法』は、一切諸法の根元である、人を理め天下を治めるにも、是非この正法を

一切世間は善  
悪ともに法華  
經的時代たり

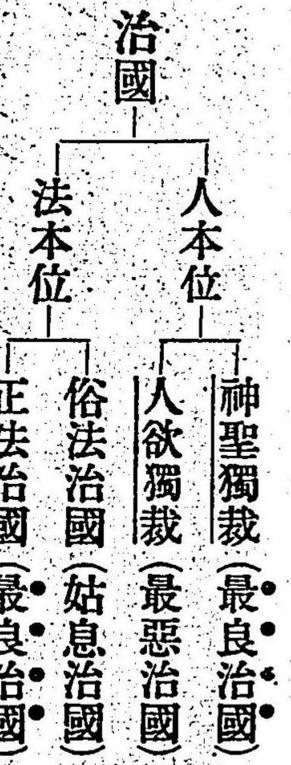
【十界平等】「法華經」には十界はみな成佛すと立地獄にも佛の性を具し、地獄にも佛の性を具し、下下平等なりとする、平等の主観的なり。

根本としなければならぬ。若し國家がこの正法を法律の精神とするに至つたならば、それこそ一番進歩した政治となるのである。恰も末法の時悪は時悪それ自らより、自然の淘汰力を發生して、世界各國ともに、滔々としてこの人權平等自由の主義を迎へるようになった。これは取りも直さず、法華經の十界平等主義が事實に現るべき前驅である。「時」といふものは怖しいものだ、けれども世間のは形式であつて精神でない、輪廓であつて内容でない、この時代の大潮勢は、先づ法華經の形式だけを自然に備へて、徐ろに精神の發生を待つたものであらう、十界平等の原理的趨勢ばかりでなく、「本門事圓」の大法が現はるべき先驅とてか、世は次第く、に事實化して行く傾向がある、果せる哉、純法華經時代としての影は、早く一般世間の思想界に磁感したのである。

【神聖獨裁】 神とも聖ともいふべき君主の獨裁。  
【人欲獨裁】 名聞利養等の人欲的に國家人民を私する君主の獨裁。

【惡隔歴】 惡差別の本徒らに傾なる階級を存して、人の固有權を隔て遮る惡思想現象。

【事觀】 心に於てのみならず世の事實に於て一念三千の觀心法門を身に修行する法門。



「觀普賢經」に政治の本要を説いて曰く「正法を以て國を治め人民を邪誑せず」と是の謂なり。

政治にも平等主義が發生して、惡隔歴の蠻風を打破したのは、世界萬邦が、任運に日本の建國に合體し、法華經の實義に契應せんとする自然作用である。

學問思想の方面にも、末法に入つてからは、大に實際的傾向があつて、その結果や、物質主義に偏した爲め、一方に各種の大發明を催進すると共に、一方には大に靈界を混濁せしめた事實はあるが、これ將た「法華經主義の事觀」に契合せんとして、先づ輪廓を畫て内容を待ち、形式を備へて精神を待て居るのであつて、事



【所謂】禮樂前に馳せて云々は妙樂大師の語。  
【理觀の台家】本宗の「理觀」を旨とするに對望して「理觀」を主とする天台一家を斯くいふ。

の一念三千の妙法が、末法の思想を統一すべき前驅であるとおもふ、所謂「禮樂前に馳せて眞道後に啓く」とは、理觀の台家が、「禮儀を基礎とした儒教」を觀察した言であるが、是は本化の教眼から時代を活觀して「自由前に驅せて十界皆成の妙法後に啓け」「物質の文明前きに驅せて事觀の妙法後に啓く」と謂つてよるしい、要するに大惡の極、大善に歸るといふ様に、大時惡が極旺した揚句、大教善の磁化を受けて、善良なる時代と一變し來り、一たび妙法眞乘の大精神を賦與して、眞の文明となり得るよう、自然の準備を爲しつゝあるのも、所詮は所謂「時」である。

本化出現の時代は、各國共に鬭諍紛雜の時代であつたが、後には漸々といづれも片付いて來た、就中、近世的文明は、尤も本化佛敎に照應すべく準備されて居るのである。

國を知る事

【化境】教化すべし「ちあて」の國土。

【國の病弊】時代に時弊がある如く、國土風習傳來の上に一種の惡風あり、それを「國惡」とも「國病」とも言ひ得べし。

第十一章 五綱各論の四 「國」 (國ヲ知ル事)

一 國ト教

「國」とは、「教化宣布の化境」であると共に、又「教法建設の依地」である、故に「化境」としては、その國土の國體から風俗人情を察して、それに契ふべき教法を布かねばならぬ、一向の野蠻國て人間の道さへ開けない處へ、人間以上の甚深高妙の教を布いても始まらないし、すべての文化が具備した國に、劣等な宗教でも仕方がない、要はその國の程度に應ずると共に、また其國の病弊を救ふ力のある教でなければならぬ、若し教義建設の依地とする上から言へば、猶の事である、「師子の乳」を容るに、必ず「琉璃の器」でなくてはならぬような工合に、教法に相應した因縁を有して居ら

ねばならぬ。

## 二 國ト機

「國」の歴史習慣は、或る場合に「機」を造り出すのである。「機」の聚合と變轉によりて、「國」の性質を進退することもある。要するに「機」から「國」を見れば、「國」は「機」の結合した形であつて、「國」から「機」を見れば、「機」は「國」の細胞である。情弱の民風(機)が盛んになれば、その結果として國が貧乏する(國) 國が貧乏すれば(國) 世に悪人を出す(機)といふような關係である。

## 三 國ト時

「國」が身體であるとするれば、「時」はその壽命である。幼童時代の

機<sup>△</sup>の<sup>△</sup>結<sup>△</sup>合<sup>△</sup>せ<sup>△</sup>る<sup>△</sup>  
形<sup>△</sup>即<sup>△</sup>ち<sup>△</sup>國<sup>△</sup>な<sup>△</sup>り

時<sup>△</sup>は<sup>△</sup>國<sup>△</sup>の<sup>△</sup>壽<sup>△</sup>命<sup>△</sup>  
な<sup>△</sup>り

頭<sup>△</sup>是<sup>△</sup>な<sup>△</sup>い<sup>△</sup>時<sup>△</sup>分<sup>△</sup>か<sup>△</sup>ら、<sup>△</sup>青<sup>△</sup>年<sup>△</sup>、<sup>△</sup>壯<sup>△</sup>年<sup>△</sup>、<sup>△</sup>老<sup>△</sup>年<sup>△</sup>、と遷<sup>△</sup>り替<sup>△</sup>つて行<sup>△</sup>くうち、<sup>△</sup>不<sup>△</sup>健<sup>△</sup>全<sup>△</sup>な<sup>△</sup>身<sup>△</sup>體<sup>△</sup>は衰<sup>△</sup>へが早<sup>△</sup>く出<sup>△</sup>る如<sup>△</sup>く、<sup>△</sup>國<sup>△</sup>體<sup>△</sup>の<sup>△</sup>旺<sup>△</sup>弱<sup>△</sup>を<sup>△</sup>國<sup>△</sup>は、<sup>△</sup>時<sup>△</sup>變<sup>△</sup>の<sup>△</sup>爲<sup>△</sup>に亡<sup>△</sup>びる<sup>△</sup>こと<sup>△</sup>も<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る、<sup>△</sup>時<sup>△</sup>を<sup>△</sup>以<sup>△</sup>て<sup>△</sup>國<sup>△</sup>を<sup>△</sup>論<sup>△</sup>ず<sup>△</sup>れば、<sup>△</sup>國<sup>△</sup>は<sup>△</sup>時<sup>△</sup>の<sup>△</sup>姿<sup>△</sup>である、<sup>△</sup>若<sup>△</sup>け<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>ば<sup>△</sup>艶<sup>△</sup>や<sup>△</sup>か<sup>△</sup>に、<sup>△</sup>老<sup>△</sup>い<sup>△</sup>て<sup>△</sup>は<sup>△</sup>皺<sup>△</sup>め<sup>△</sup>る<sup>△</sup>が<sup>△</sup>如<sup>△</sup>く、<sup>△</sup>無<sup>△</sup>形<sup>△</sup>の<sup>△</sup>變<sup>△</sup>更<sup>△</sup>力<sup>△</sup>が<sup>△</sup>結<sup>△</sup>晶<sup>△</sup>した<sup>△</sup>形<sup>△</sup>示<sup>△</sup>て<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る、<sup>△</sup>國<sup>△</sup>を<sup>△</sup>以<sup>△</sup>て<sup>△</sup>時<sup>△</sup>を<sup>△</sup>論<sup>△</sup>ず<sup>△</sup>れば、<sup>△</sup>時<sup>△</sup>は<sup>△</sup>國<sup>△</sup>の<sup>△</sup>血<sup>△</sup>行<sup>△</sup>である、<sup>△</sup>大<sup>△</sup>權<sup>△</sup>が<sup>△</sup>武<sup>△</sup>門<sup>△</sup>に<sup>△</sup>歸<sup>△</sup>した<sup>△</sup>時<sup>△</sup>代<sup>△</sup>には、<sup>△</sup>國<sup>△</sup>の<sup>△</sup>秩<sup>△</sup>序<sup>△</sup>が<sup>△</sup>政<sup>△</sup>治<sup>△</sup>の上<sup>△</sup>にも<sup>△</sup>人<sup>△</sup>道<sup>△</sup>の上<sup>△</sup>にも<sup>△</sup>壞<sup>△</sup>亂<sup>△</sup>し、<sup>△</sup>王<sup>△</sup>政<sup>△</sup>復<sup>△</sup>古<sup>△</sup>萬<sup>△</sup>機<sup>△</sup>一<sup>△</sup>新<sup>△</sup>の時<sup>△</sup>節<sup>△</sup>に<sup>△</sup>還<sup>△</sup>れば、<sup>△</sup>政<sup>△</sup>治<sup>△</sup>も、<sup>△</sup>學<sup>△</sup>問<sup>△</sup>も、<sup>△</sup>富<sup>△</sup>も、<sup>△</sup>技<sup>△</sup>藝<sup>△</sup>も、<sup>△</sup>都<sup>△</sup>て<sup>△</sup>が<sup>△</sup>發<sup>△</sup>達<sup>△</sup>して、<sup>△</sup>確<sup>△</sup>實<sup>△</sup>な<sup>△</sup>る<sup>△</sup>文<sup>△</sup>化<sup>△</sup>を<sup>△</sup>布<sup>△</sup>か<sup>△</sup>れ<sup>△</sup>て<sup>△</sup>開<sup>△</sup>明<sup>△</sup>國<sup>△</sup>と<sup>△</sup>な<sup>△</sup>る<sup>△</sup>が<sup>△</sup>如<sup>△</sup>き<sup>△</sup>もの<sup>△</sup>で<sup>△</sup>あ<sup>△</sup>る。

## 四 國ノ類別

其一……無道國

【人道教】三乘の外に、天乘と人乗とを加えて五乘といふ。人乗は専ら人倫の道のみを説く教即ち「提謂經」や「大方廣經」の如きこと也。

【西洋】西洋諸國は現今の處耶教本位なれど、彼れの大勢なり。而して向上進取の機となし、一轉して一乘の機となること遠からざるべし。

全て何の道もない國といへば、水草を追て住んで居るような最野蠻國である、かゝる國には佛教の如き高尚な教はとて弘められない、かういふ處へは、それこそ大悲方便して、「人道教」の初歩でも布くの外はない。

其二……外道國

すてに多少の文化を有し思想を有して居る國は、それ相應の宗教をも有して居る、それを「外道國」といふ、幾ら世間の開明が進んで居ても、西洋などは現今猶外道國の部分に屬して居るが、時と機とは、今に必ず彼れを佛教國にするに相違ない、同じ外道の内でも、今の「印度」や、「土耳其」の如きは、外道國中の下國で、歐米の如きは外道國中の上等國である。

其三……小乘國

今ていへば暹羅などは、一向小乘國の活證文であらう、「西藏」などは教は類似の大乗で、心は小乗にも劣つた國であるようだ、劣等の教を精神として居る國は、一向に開發しない、偏へに教法が然らしむるのである。

其四……大乘國

大乘高遠の教義と儀容を以て國の性命とした極適當の見本は、「唐時代」の支那と、「奈良朝」及「平安時代」の日本であらう、支那は大乗教の盛んな國であるが、先天的國性は、「大小兼雜國」の部類であらう、朝鮮などは兼雜國の「體を備へて微なるもの」といふ位の分際であらう、獨り日本は「先天的大乘國」であつて、而かも權大乘でない、實大乘の氣味を有して居る、例之ば、支那の思想で謂つて見ると、周公孔子の思想は大乗有門の面影があり、老子

【西藏】その國教は眞實宗の原始的ともいひつらん極めて迷信的に極めて幼稚なる雜佛敎。

【有門】大小乘ともに、有門、空門、非有非空門、亦有亦空門、の四門あり、大乗有門は俗諦常住を説いて、秩序井然の理味を有す、周此見に類似す。

【別教】 四教おのづから別れて、各其の門を以て、別教は行相排布といふて、隔歴して相排せず、その教の有門なる相と博なるを別教有門の相といふ。

の虚無は小乘「三藏教」の空門に似て居るし、莊子の亦有亦無の見は「通教」の臭がする、先天的に大小兼雜の氣味がある、よし大乘國としても、三皇五帝三王より周公孔子に至るまで、支那思想の源泉といふべきは、多く禮儀典節文物制度の發達が比較的秩序井然たるに在る、其風氣は明かに別教の有門にして、圓教趣味でない、日本國は固有の思想が、既に先天的に實大乘趣味であつて、殊に「調和」といふことが國性になつて居るのは、圓教趣味の思想が、國體に附着して居るのである、それゆゑ小乘經は渡來しても始めから學問と看做されて、宗教の扱ひを受けずに了つた、「俱舍宗は法相宗の寓宗となり、「成實宗は三論宗の寓宗として扱はれた、「寓宗」とは居候の宗旨といふことである。

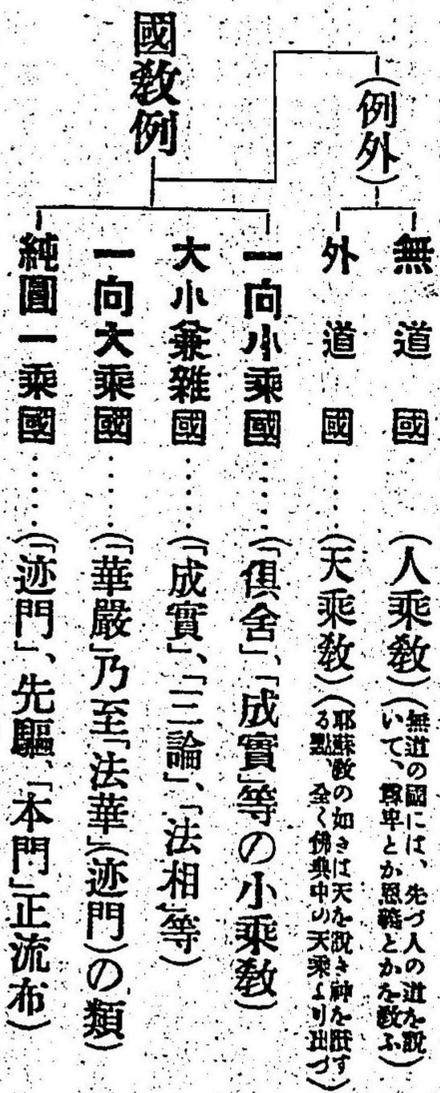
其五……一 乘國

【醇化】 物事を醇精取要して、粹を絞り取るといふ意味。

【三道一致】 「聖德太子」一統帝に答へて、「神道は道の根、儒教は道の枝葉、佛法は道の華實なり」と奏す。  
【勅教】 三種の神器、萬世一系天壤無窮王道擴張の神勅。  
【事業】 聖武天皇東大寺の建立は、正しく國本を確定する所の大規模に出づ、其他戒壇を建て、國分寺を立て、法的に國を治めたまふ。

「日本一州圓機純一」と言つて、大乘も大乘、大乘の神髓たる法華經の相應した國だといふことは、日蓮聖人已前にも夥多の先賢によりて證明されてある、神代の風俗を見ても、國體の精神を見ても、醇化主義の風氣が、ありくと解る、「醇化作用」は、被醇化物に接すると、必ず正確分明にその眞本領を表はさねば已まぬ、聖德太子に至つて、吾國の醇化力は、新渡來の儒教と佛教とに對して、「日本の消化」を與へて、儒教を「枝葉」とし、佛教を「實」とし、神道を「根」として、三道の一致を唱導されたのでも知れる、天照太神の勅教、神武天皇の經營、聖德太子の祖述、聖武天皇の事業、傳教大師の掣節で、隱顯交絡して、一乘主義の體例を發揮されて居るから、終にはこの「天壤無窮」といふ無限の力によりて世界の太光明としての一乘主義が、此國に建てられねばならぬ、

先天の因縁約束を具備して居るのである。



### 五 開顯妙國

古い處では、彌勒菩薩、須梨耶蘇摩三藏、いつれも遙かにこの「日本」を豫言して、「法華經の國」と言つた、聖德太子も傳教大師も、日本は法華經の國だと合點して、その準備をした、國體國性

【彌勒】「彌勒論」に「東方に小國ありその中唯大乘の種姓のみあり」といふ「須梨耶蘇摩」の事前にあり

開國已來大事  
件十有五あり

が確に爾うても、時節が到來しないうちは、それが完全に表現せられるわけに往かぬ、時も機も國もすべてが揃うと、いよく本音を發するのである、梅の香ひ櫻の色も、春が來なければ色も香も顯はすことは出來ない、それなら時さへ來ればと言つた所が、柳には梅の香はなく、松には櫻の色も無いのである、末法に入つて、吾が日本國は、いよく眞正に日本の特色を發揮すべき時機を得た、日本が、今日に至るまでに、尤も大事件といふべきは、『天照太神の建國の詔勅』と、『神武天皇の橿原奠都』と、『聖德太子の出現』と、『聖武天皇の東大寺建立』と、『弓削の道鏡の僭上』と、『桓武天皇の平安遷都』と、『源平の亂』と、『北條義時の僭亂』と、『日蓮聖人の出現』と、『元寇の役』と、『南北朝の時立』と、『明治の王政維新』と、『憲法發布』と、『征清の役』と、『征露の役』の十五で

【三上皇】北條義時專横にして後鳥羽法皇を廢位に順德上皇を佐渡に土御門上皇を土佐に遷す。一日蓮聖上人一常に之を以て、教法の大儀名分業れたるの致す所と爲し、教法の罪なりとしまふ。

【一匹夫】日蓮聖人常に「日本國の亂れは伊豆の國の民たる義時の下知に從ふ故なり」とて、義時を逆臣と喝破したまへり。

ある、その中でも尤大きい事件といへば、皇祖皇宗の建國と相對して、全く正反對の珍事といふべきは、『道鏡の僭上』と『義時の僭亂』とである、道鏡のはまだ増長したといふばかりで、清磨の直言にその非望を挫かれて、其を遂げずに了ったから、比較的小事であつたが、義時の僭亂に至つては、武力を以て之を強行したのである、堂々潤歩して上を侵し、三上皇を三島に流し奉つたのである、この武斷的僭逆に就て、當時の天下は之を問ふものさへなかつた、義時は伊豆の國の民である、職位から言つても朝廷の陪臣である、一匹夫の爲に此時日本の國體は一時破壊せられたのである、これを『天下の大變』と謂はずして將た何とか謂はう、日本の歴史中、前にも後にもあるべからざる一大變事であつた、これが承久三年である、北條九代の專横も、足利尊氏の叛亂も、徳川幕

國體を自覺せざる民は常に精神的滅亡を夢みつゝある民なり斯くの如き民を有せる國は禍なる哉

國の大負傷

國靈よく偉聖を産む

府の跋扈も、およそあらゆる名分の亂れ大義の欲損は、みな悉く義時が醸出したのである、國の威靈があるから、危い中にも全然亡びる事はないとしても、假初にも國體の意識が消滅したら、精神的に國が亡びたやうなものである、こゝに於て國の自然の要求としても、國靈の自感としても、これを意識の上に明了に回復する必要がある、天照太神、神武天皇を有して居る國は、義時の爲に受けた『國の大負傷』を治癒すべき偉靈を出す力がない筈がない果せるかな義時が三上皇を三島に流し奉つたといふ承久三年の翌年を以て、之を取返して序に日本國體を精神的に明確ならしむべく日本國を説明せる偉人は出現した、即ち貞應元年二月十六日、而かも天照太神の御厨屋たる安房の神領に降誕せられた、本化聖祖即ちこれである、日本國體の永久を擔保すべき證明として、先

【轉輪聖王家】 佛敎の傳説に於て、世界統一の大皇帝たる事は、その家柄が日本天皇家に詳し。

眞理事縁一如融即せる上に光顯せる淨土乃ち是れ吾人が理想の常寂光土これなり

天的法華經國は、法華經を以て國の精神と爲すべきものなりとして、一乘國の一乘國たる所以を明にせられた、即ち日本固有の圓教趣味は、根源日本の國祖が久遠本佛の應現であるからである、日本國は「一國即一家」で、世間には轉輪聖王家、出世間には妙法護念の靈的種族の祖家である、故に道義的に世界を統一する自然作用として、天地間文化の發展集中調和整齊に尤も便宜なる地點として、此日本國に統を垂れ國を開いたのである、即ち「法華經を建立する爲に建てられた國」なのである、一大事因縁といふのはこれである、單に眞理からいへば、どの國でも本佛の淨土である、若し開顯の上から言へば、妙法の光に觸れて、始めて事理一致せる眞の寂光土となるのである、更に開顯の妙法を今一層實際的に教と因縁と綜合して宗旨的にいへば、開顯の勝能は、事縁の配合

因縁は事の精華なり

によりて、更らに一層の靈氣を帯びた活法門となるのである、理推の淨土でなく、事實の寂光土となるべき特質を有した「純圓一乘の國」は、即ち「本門事圓の開顯を経たる本化昭見の妙國」である。特に日本を靈ならしめる因縁、特に日本が靈なるべき因縁、法の方からも、國の方からも、相互に照發すべき動機を包藏して居る、これを「一大事の因縁」といふのである、因縁は「事の精華」である、理論以上空想以上、眞の事實である、即ち佛敎大化の一大事、亦これ人生の一大事である。法華經の教理から、「開顯」といふ「妙」の一靈火を投じて、始めて人間の國が聖の國と成り、闇の國土が光明の國と成るのである、故に國を「教の體」とし、法を「國の靈魂」として、こゝに完き理想國が現出する、それが開顯妙國である。

序を知る事

第十二章 五綱各論の五「序」

〔教法流布ノ前後ヲ知ルコト〕

一 教と序

如來の聖教も、順序なくしては弘まらな、小乗の後に權大乘が出て、權大乘の後に實大乘が出るといふ順序は、拙の後に巧が出るの順序である、在世にも先權後實、先迹後本の順序であつて、滅後も矢張その通りである、要は教義の浅い部分から前に發生して、漸次深くなり行くのが、教理の自然作用でもあるし、一つは人の智識も段階的に向上するからである。

二 機と序

「機」は生きて居るから、小く一人の上で言つても、幾分の進歩

【先權後實】 佛化導の方法は必ず方便たる權教を先きに説き、而して後實教を説くを例とす。  
【先迹後本】 前權後實に同例なり、迹門を先きにし本門を後に顯はすを順序とす。

はある、機の社會的變遷から觀察しても、常に進化の作用を呈しつつある、隨てこの變化に應ずべく、教法の順序的變化を辿らねばならぬ。

三 時と序

「時」は駸々として進みつつある、これに應ぜんとする教法は、いふまでもなく時弊の後を逐ふて、これを救済しつつ進まねばならぬ、教化の順序得失は、尤も意を用ゐて攷究せねばならぬ、變移が「時」の持前とすれば、「時」が「教法流布の前後」と離れ得ざる關係あることは、猶藥の進退が、病の經過と順序を駢べて行くようなものである。

四 國と序





【摩騰法蘭】 初めて支那へ佛法を傳へたる、摩騰、迦葉竺法蘭の二名僧は印度の支那に入りて後漢の明帝の時乘せて來りし故、佛經を白馬の歌とも言ひ傳ふ。

が、當時支那に於ける初め目見えの摩騰法蘭の兩師は、支那を觀察するに、『淺薄にして行儀正しき儒教』『偏狹にして迷信勝ちなる道教』などが、在來の土教として大勢力を占めて居るから、先づ之を片付けてといふので、『四十二章經』ぐらゐを以て、掃海作業を行つたのである、それから作戰計畫が圖にあつて、いよいよ佛教の天下となつたから、そろ／＼印度已來の論争を始め出した處が、風土の加減か、こゝにも調子よく發達を遂げて、大乘教中の空有二宗の諍みより、ずんと高尚な思想が發達して、高きは華嚴の如く、深きは天台の如く、扱ては沈痛なる三論宗、壯大なる法相宗、奇警なる眞言、飄逸なる禪宗、簡易なる淨土宗等、前後相踵て發展した光景は、祖國の印度にも見られないほどの盛況であつた、要するに印度における大乘論議は、支那に來て一層適切

【一邊】 天親龍樹内證冷然外は時の宜しきに適ひ各權りに據る所あり、而も執し、遂に解し學者苟くも一邊を保つは、大に聖道に乖けり」と天台は釋し給へり。

【三無差別】 「心佛及衆生、是三無差別」は華嚴經にあり。

【常住】 「涅槃經」に、佛性常住を説く。

【二乗作佛】 「聲明」縁覺の成佛する事。

【龜毛兔角】 有りもせぬものに就て議論する事。

【全如意珠】 如意珠は眞理に對し、全眞理の事なり「半如意珠」に對す。

に成人したのである、天台が、龍樹と天親との調和を試みて、『おの／＼一邊に據る』と判じた調停は、高い議論の爲に、低い諍點が邪魔になるから、それを鎮撫して置いて、注意を新舞臺の方へ引寄せたものである、華嚴の『三無差別』も、涅槃の『常住』も、それれまで競りつめて來た處で、『二乗作佛、久遠實成』といふ二大條件が成立しなければ、折角の三無差別も常住も、終に龜毛兔角に歸して了ふ、こゝに於て天台の『一念三千論』は、法華の『二乗作佛、久遠實成』を票榜して、此高を以て彼の卑に足し、此饒を以て彼の缺坎を補充して、全如意珠を顯はさうとかゝつた、これて一段落着いた、あとはこの完全明白なる天台の主張が、問題の中心となつて、これに種々の疑問を挟み、剽窃を試み、加上を試みたりして、種々の教義論争が始つた、恰もその根底を叩いて、根



天地自然の需求は遂に本化大聖を産出す

展を堅實に明徴にして行く妙作用を具して居る、時機が熟すれば秩序正しき順性發達を遂げるのである、既に伸びるだけ伸びた揚句はどうなるかといへば、それを纏めるのと、その正味の醇要を發揮するのが必要である、雨雪の後に快晴を要し、旱天に潤雨を要するが如く必要である、『必要の時に必要のものが生ずるのは天地自然の要求』といふものである、佛教最後の發展は、果して如何の状である、いふまでもない歴史が説明して居る、世界の中の日本、日本の中の鎌倉、混中の混、雑中の雑を極めた中に、尋常ならざる現れ方で現れた宗旨は、日蓮聖人創唱の「本化妙宗」ではな

### 六 本化妙宗ノ興起

病が盛んになつて醫藥を要する如く、教法發生の感應上、それが順序の必然として、「本化妙宗」は開宣せざるを得なくなつた、たとひ「本化上行が末法に現れて法華經を説く」といふ事が、經文に豫言して無かつたとしても、たれか此點に氣の着くものがある、この紛亂を一匡すべく、不世出の教傑が出現して來なければならぬ場合に推し逼つたのである、果してこの大任務を負へる最高審判の裁決者は出現した、『裁決』が主で出たとすれば、その高妙深絶なる本化の教觀は、所謂『裁決の法文』である、若し「本化妙宗」の大法を顯はすための破邪裁決であるとすれば、此等の諸宗は、すべて本化出現の先序と謂ふべきである、裁決しながら本意は顯はれ、本意を顯はすに付て究竟の裁決は完成せられたのであつて、『所謂破邪の當所に顯正し、顯正の當所に破邪する』ので

【先序】 顯はれんとする  
ことの「前脚」を「下」に  
「し」といふほどの意。

【法統】 慈覺大師智證大師の爲に傳授大師の眞意を失はれたるを指摘して正統回復を三千の大衆に呈出たれど、山徒皆迷深くして反古する能はず。

ある、然るに相手の方が、素順序的に發生したものであるから、こちらも亦時に急なるものを先きにし、緩なるものを後にし、淺を先きにし、深を後にするといふ順序に運んで行かねばならぬ、この順序としては

- 第一に 諸宗を總すると傳へられたる叡山の法統を正すの議より始め（準備の二）
- 第二に 正法開宣を國祖天照太神并に國聖上宮皇太子に上奏し（準備の二）
- 第三に 人間や國を相手にせず正々堂々の儀式を以て、一天の精粹たる天日に向て宗旨建立を宣言し（開宗）
- 第四に 國家の實際主權者たる時の執政に對つて、元寇の國難を豫言し、國家的諫言を提出して、先づ國害の眼前なる「禪

【公場對決】 天子將軍の御前にて、天下諸宗の大名僧を集めて一時に邪正を決すべき大問答なり。

【經證】 末代に法華を弘めるものは必ず三類の法敵に苦しめられ、刀杖瓦石、流罪度々、死罪等の難に遭ふべしとある經文の豫證。

【約人の歸信】 北條氏の個人的歸依。

- 宗」と「念佛宗」とを打撃し、因て以て公場の對決を要求し（立正安國論上書、「國諫」第一回）
- 第五に 正法の威力を示さんが爲に、一身すべて法華經の活現なることを現はして、經文の豫言を身に顯はし（龍口法難の顯本「國諫」第二回）
- 第六に 經證身に具足し、『本化上行』たることを立證し得るを待て、佐渡に於て大事の秘奧を開宣し、教相に『開目抄』、觀心に『本意抄』、修行に『如說修行抄』を撰述し、閻浮同歸の本尊を顯發し、『天台眞言』破折）
- 第七に 鎌倉政府の阿順的歸依を破して、一千町の寄附田と、愛染堂別當職の榮爵を拒け、約人の歸信を否定して、『國家的信伏』にあらざれば、眞の宗教にあらざる趣を確示し、以て





【有宗二宗】 天竺は、小乗には二十部の分派なりしが、大乘には瑜伽唯識の法相宗と中觀無相の空宗との二宗あるのみなり、即ち龍樹系（空）と天親系（有）なり。

以上の表は、ホンの概略を擧げたのであるから、天竺の宗旨は省いた、これは有宗二宗の交迭だけで、別に記すべきほどの事がなからである、それから支那では天台宗の後に於て、「法相宗」が盛に興っただけで、其後は教義上の論争も火の消えたように鎮り大勢が日本へ移つて来て、日本では種々なる新宗が續々勃興して来た、今その中心勢力の移轉に循て、佛教各宗の興立を歴觀すると表に示した通り、百年も経つうちには三つも四つも新しい宗旨が發生して来て居る、殊に「末法」に入つてからは、百五十三年間に兎も角も歴とした宗旨が、八つも新たに興つて居る、遠く溯つて佛滅後から考へても、小乗中の論争から、大乘對小乗の論争、大乘中の論争と算へて來ると、やはり新意見新主張の興立したのがほとんど毎世紀のようである、中々五百年の永の間も閑暇で居る

ようなことは、三國ともに曾て無かつた、然るに「本化妙宗」の開創と共に、その後六百何十年の今に至るまで、どこからも新たに宗旨教判の發生しないといふのは、眞に「たゞ事でない」と思惟せざるを得ないのである、尤も順序では一遍上人の「時宗」が、一番終りになつて居るが、要するに念佛宗の一派たるに過ぎないから特種の教判によつて一家を爲したものと認めないでよろしい。

最後の決判者が出て、最終の審判を與へた後は、佛教化導の大勢も、「判教定宗」の綱格も、一言を挾むことの出來ないようになつて居るからである、たゞ偶ま破折を蒙つた宗流の殘黨どもが、未練らしく死んだ兒の齡を算へて、時々同じことの宗論を繰返へすだけのもので、教義としても立脚地を失ひ、化導としても無効のものとなつた今日、此等の諸宗は、潔くあらゆる宗團を解散し

【判教定宗】 先づ教相を判明して而る後に宗旨を立てる事。  
【宗論】 甲宗と乙宗との宗義の勝劣邪正を論議決着する事。

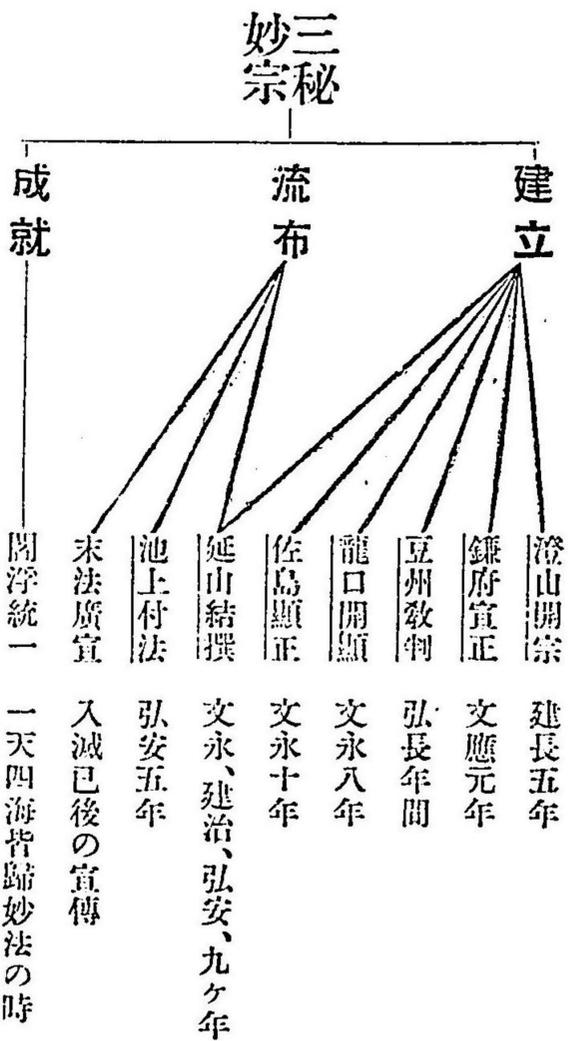


【一箇浮提】 妙法廣布の號を傳へせる聖語「報恩鈔」の文なり。

本門戒壇の事は後に詳し見るべし

て、釋尊の御前に懺悔しなければならぬのである。今に何かの動機で、日本一國はあるか、世界中残らず眼が醒めて、『一箇浮提の人ごとに有智無智を嫌はず一同に他事を捨て、南無妙法蓮華經と唱ふる』時が来るに相違ない、その時こそ此日本國が世界の中心として、靈界の巨鎮たるべく、人類の大平和大光榮の神聖なる擔保者として、世界中の人の一生に一度是非とも踏みに來なければならぬ『本門の大戒壇』が此日本國に建てらるゝのである、爾なつて始めて日本の神國たることも、本化上行の特に應迹を此國に垂れたることも、天照太神の勅宣も、神武天皇の經營も、聖德太子の大思想も、明治天皇の勅教(世に「教育勅語」といふもの)も皆一時に滿天の光を放つて來るのである、故に本化の宗旨は、順序としては「建立」と「流布」と「成就」との三つに次第して

居るのである、而して今は「流布」の時代である、六百年間は試験中とても謂ふのであらう、「本化妙宗」のいかなる宗旨だかといふことが、世に少しも知れずに居たのは、げに不思議の一つである、蓋し「是から！」なのであらう。



【澄山開宗】 安房國清 澄山の開宗。  
 【鎌府宣正】 鎌倉執權 鎌倉執權に對し「立正安國論」上奏。  
 【豆州教判】 伊豆流罪 中五綱教判を顯はす。  
 【龍口開顯】 龍口法難 上行の法身を密顯す。  
 【佐島顯正】 觀心本尊抄の撰述並に御本尊顯發。  
 【延山結撰】 佐後の著述及講學。  
 【池上付法】 武藏池上に於て御入滅の際六老付囑並に日像へ帝郡弘通遺命等。

### 第十三章 五綱ノ結論

#### 一 能判ト所判

#### 五綱の結論

神智を以て知るの境界を無視し凡智を以て知ると同様とせるは類を知らざるの甚だしきものなり

五綱教判に就て、やゝもすると『此五綱を以て宗教宣布の票準として、任意に適宜の進退を爲すべき料にとて残された指南である』といふように考へて、生意氣千萬にも、自ら能判者の位地に立ッて、新判例を下さうとするものがある様だから、一寸その不可なることを斷ッて置かり。

この綱判は、本化大聖の立宗に要した教判例であツて、他人に『この轍で行れ』といふ指南ではない、判定の票準を授けたのでなく、その内容を訓示したのである、故に一々『知る』といふ語を置かれてある、『知る』とは本化の智慧で知ること、吾々凡智で

内容判を意順して説き擴げるは差支なし間違さへせずば佳し

【本未有善】『本未だ善有らず』と訓む、いまだ法華經の乘種を心田に植ゑざるもの云ふ、善とは法華經の佛種なり。

【法華折伏】『法華は折伏にして權門の理を破す』との訓ず、天台大師が法華經の經牀が折伏なるを定めし語なり。

知るのではない、凡そ『教法を撰び宗を立てるには、此五つの票準から考へて掛からねばならぬぞ』といふ規範を垂れたのが、此五綱の能判である、乃でこの五つの準規で、その一々を細究して『教』は何を取る、『機』は何時は何、といふように、その指す所のものを確と撰びあげた、例之へば『教』は『法華經が如來の本懷』と決し、『機』は『本未有善には純法華經の化導』と決し、『時』は『第三末法法華經流布の正時節』と決し、『國』は『日本神國法華有緣宇内統一の靈國』と決し、『序』は『諸宗雜亂邪見熾盛の最終決判として法華折伏破權門理の開宣』と決した、其一々内容の指定が、それこそ本化の正智精神であツて、吾々はこれを確信遵守して、ますくその範圍を明了に研究するまでのものである、必ずその所判を差し置て、能判だけの形式を襲用すれば可いかのよう

に心得てはならぬ、宗門の中にも斯ういふ誤解を懐いて居るものが往々見えるから、用心の爲めこゝに一言して置く。

### 二 五綱ノ大歸

五綱の教判は、その個々がすでに用意周到の妙式たるのみならず、一々が互に他の四綱と相照應して、環の端なきが如く、常山の蛇の如く、相依り相成じて、互ひに個々の義を證明して居る、是れ畢竟『法華經の圓理から發生した圓解なるが故』であらうが一つは本化の聖智、彼の無碍の四智四辯が、理窟多き末代の厄介ものを攝收すべく、『一點秋毫の隙のない妙判』を垂れたものであらうと信ずる、其の相依相發相顯相成の妙機は甚だ説き難いが、今圖で示して見ると

【圖解】 圓融の妙解、法華經の意匠を體達せる解了にして法界一體の見地の下に、事物を妙融して、地の下に真理の活現に歸結するを云ふ。

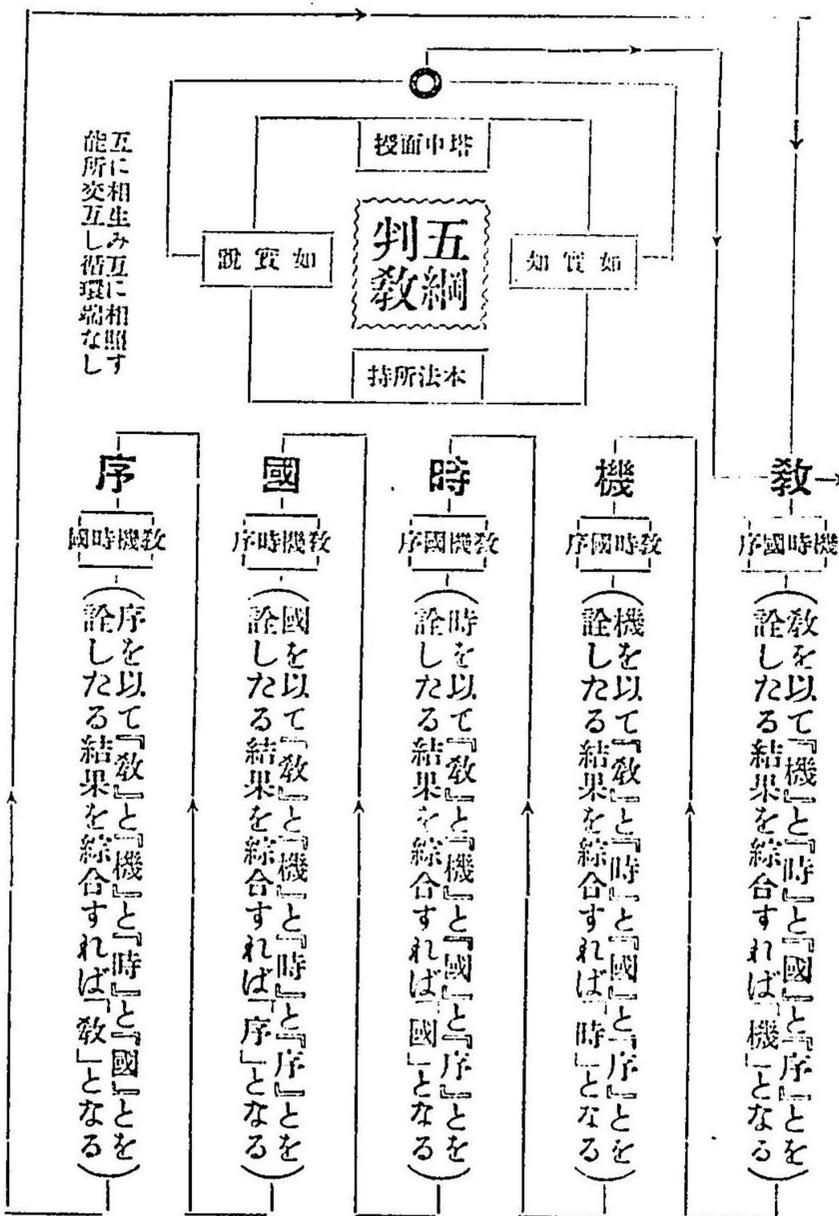
### 如實の知判 如實の説法

【如實知】 實に如へる智にて佛の眞意と衆生化導の法を知るなり、本化には如實の四無礙智あり。

【如實説】 實に如へる説にて、眞理にかなへる説法なり、如實に經に隨義に如實説あり。

### 三 秘立宗

### 大慈折伏本因下種の大化導



### 宗教學問聚美の大道

五綱の裁判は、宗教的に完備せるのみでなく、學問的にも整頓したものである、哲學的觀察は言ふまでもなく、或は社會的にも觀察し、或は歴史的、或は地理的に、用意の届いた上に最も要領を把住した至判である、斯ういふ確實深到の講究でなければ、圓滿なる理教は発見されないのである。

他家の裁判が、直ちに經を分類判別して、自己の主張に資したのと趣を異にして、この五綱判では、能所合立して大らかに規を成してある、教を判ずるの前に判を判ずるの要があるから、直ちに他家と得失を決するの競争を避けたのは、互格に諍ふべき位地にあらずして、彼れを判決すべき位地であるからの事、原告でなく『判官』である、始審でなくて『終審』である、兵に將たるにあらずして『將に將たる』が故である、教の一に於ては半ば天台の判

【能所合立】 能判と所判と合して立てたる事、例へば「知教」といふのは能判その教の分類を識別せられたるものは所判にいきなり「單判」にあらざるに「教を判ずる基礎判を與へたるは、能判にあらざる」といふ。

【文證】 經文、論釋の證據  
【現證】 現見の史的事實の證據

【折伏】 破折屈伏又は破折調伏の義、秋毫も惡義の存在を許さず強ちに他の立破を破りて屈伏させると。

釋を認容したのは、それ即て裁定の裁定たる所以である、その他一切の判例が『道理よりも文證、文證よりも現證』といふ格例を取つたのは、末法付囑の大権能に基いたのである、『智者に我義破られずは用ゐるじとなり』とは、この判定の大正至公なることを保證した所以である。

### 三 折伏立教

『折伏立教』といふことは、折伏で教を成立したといふことであつて、折伏を手段として立てたといふことではない、『折伏的に立てた』といふことである、『折伏』とはあらゆる邪法邪見の存立を許さないといふことであつて、下種の化導には、是非この折伏を用ふるのである、『種』の問題となれば、必ず雜混を許さない筈である

一切法みな法華經を離れての存在を許さず法華經に合致する時悉く之を容れ法華經に背馳する時悉く之を破る是れ法華折伏の淵旨なり

【攝受】 攝引容受の義他を破らずに容るし納れる化導法これなり

故に『法華折伏破權門理』とあつて、法華經の發現は、一切法を統括するのが主意であるから、何の法でも法華經に會し入れて、全く一法とならねばならぬ、若しそれが各自に存立するとなれば絶対に之を否認するのである、『十方佛土の中には、唯一乘の法のみあつて、二もなく亦三もなし』、若しありとすれば、それは佛が方便の爲めに説いた場合だけである、今は萬法歸一の妙法を説くとして、『正直に方便を捨て、但無上道を説く』と名乗つた法華經はどこまでも唯一主義を取るから『法華折伏』といふのである、在世の法華經の發現ばかりでなく、滅後末法の純法華經時代に於ては猶更のことである。

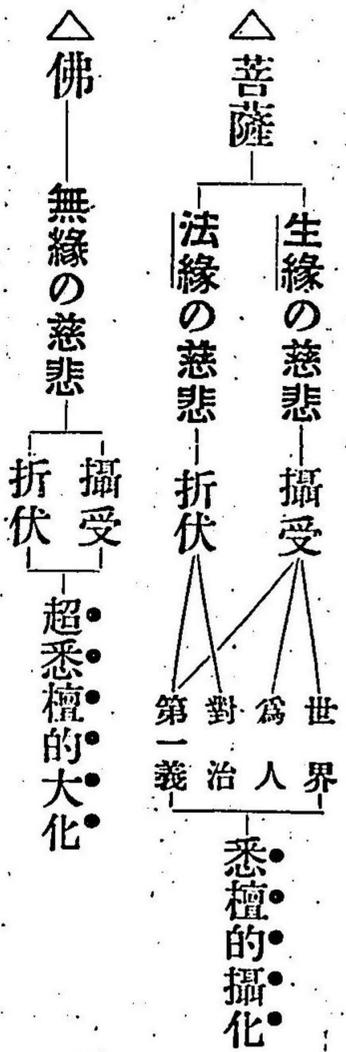
世に『折伏』といふことを、教を弘める手段の一だといふように軽く見て『攝受』(他を破らずに認容して弘める化導法)と折伏と

【攝折】 攝受と折伏の略善緣は有限性の慈悲、佛は無限性の慈悲、例へば大臣の権能と天子の権能との如し

【生法二緣】 衆生緣の慈悲と、法緣の慈悲

【生緣】 一切衆生を見て父母の想をなし、又赤子の想をなし、拔苦與樂する所の慈悲  
【法緣】 一切法はみな因縁より生ず自性なしと觀じて惡を去て善に就かしめ拔苦與樂する慈悲  
【無緣】 法の相及び衆生の相に縁せず、住せず、平等の大慈遍く法界を覆ひ、平等に拔苦し、任運に與樂せしむる根本的大慈悲心

は、車の兩輪の如く鳥の兩翼の如きもので、一方のみに片寄ることとは出来ぬ』などといふ輩があるが、それは菩薩の用ゐる攝折であつて、佛の攝折ではない、迹門の攝折であつて、本門の攝折ではない、勿論弘教の一手段としての攝折もある、それは『生法二緣の慈悲から出る化導で、即ち悉檀攝化の場合の攝折である、本化妙宗の攝折は、無緣の慈悲』から出る攝折であつて、超悉檀の攝折である。



【乘法の主人公】單の法にてなく、教化したる發生するもの故、佛によりて行の主人公といふ。

【本佛體内】本成の釋尊は、本時因果諸の佛なり、この本佛の體内の本因の菩薩とあらはるゝなり。

無縁の慈悲は、菩薩の境界でない、根本法の發動に伴ふ慈悲である、則ち乘法の主人公たる佛と、佛の意たる法華經に限られたものである、純法華經の導師は、凡夫でも菩薩でも、自前の化導でなくて、本佛の使として、如來の事を行ふのである。

「當ニ知ルベシ此人ハ即チ如來ノ使ナリ、如來ノ所遣トシテ如來ノ事ヲ行ズ」………(法師品)

況や本化の菩薩は、本佛體内の菩薩であつて、普通迹化の菩薩とは、出所が全て違ふ、この本化純法華の導師が、本佛の大權を行ふ上に於て、根本法の發動として、本因下種の大化導を起すのであるから、悉檀的行化だの、方便利生などの手緩い仕事ではない、全法界を一時に震動させるほどの根本動である、教法、邪見、妄想、顛倒、愚論、魔論、罪障、煩惱、あらゆる區々現象、區々存在を、

區々の存在を許さず

人師私見の諸宗教も法華經も同じなりと思惟して「應病與藥」を金科玉條とするものは所謂牛乳と石換糖とを混合するものなり、本化を以て通佛教と同例に解するは牛乳も水も同じといふに俾し。

在を、根底から否定して、法界唯一乘の大宣言を下すのである、直ちに本法に契合するの外、何物をも何事をも許さない、恰かも曉雲一たび開いて、旭日の瞳々として昇るや、いかなる山間幽谷も、光線の直射すると否とに拘らず、些の闇を止めざるが如きものである、さういふ意味での折伏立教が、「本化妙宗」の成立したから、普通の尺度では計れない、悉檀以上の化導であることを知らないで、本化の立教も普通佛教も同じだと考へたのは、乳も水も同じだと考へたやうなものである。

然らば本化の化導には、「攝受は全くないかといふと、無いどころではない大に有る、たゞ悉檀的攝折のように、二羽兩輪的に並べて存在せずに、表裏的に存在して居るのである、即ち「大化發動」の面は大折伏、「自受法樂」の面は大攝受である。

【折面攝裏】 その發動の全面は折伏にして、攝受は心の折伏をする裏面の大悲心により「日蓮が難にあふは安樂行なり」と宣ふ類なり。

【攝面折裏】 經の涌出品に、本化の菩薩を設けて常に靜なる處を樂はせて人衆の中にあるを樂はす、所謂多きことを樂はず、等とあるこれなり。

### 末法唯一化

【雜化】 純實化導ならざる化導法、實經も權教も雜多に説き、攝受も折伏も雜一に應じ、場合なく、局部くして行ふ化導。

超悉檀攝折

●●根本動(大化導)——折面攝裏——

攝受と折伏は一大本法の大動及大止なりその効用を異にしてその根基を一にす猶物に於ける表裏兩面の如し

●●枝末動(局部折伏)

●●根本寂(大涅槃)——攝面折裏——

●●枝末寂(局部攝受)

世界為人第一義

攝悉檀

根本法の威力として起つた「折伏」は、横に一物をも漏さず消化すると共に、豎にも此法化のあらん限りは同一作用である。「末法時中唯一化導」と定つた以上、天地が頹れても變更すべきものではない、若し之を變ずれば、それは純法華經の化導でなく、「雜化」に移り「枝末動」に變じたのである、末法弘教の大綱格は、本化再び出て、親ら變更を命ずるまでは、何人も動かすことの出来ない筈

のものである、その位の仔細があればこそ、斯くも正確にして周到なる綿密公正の教判を垂れて、「末法折伏の大化を保證した」ので、それが即ち「五綱教判」である。

「折伏」は教を弘める爲めばかりではない、「人を成佛させる」にも必要である、折伏で人の執着煩惱を一掃するのである、折伏は直ちに修行である、「五綱」は軌道、「三秘」は機關車、「折伏」は火力である。

### 四 四大格言

五綱の大格を正式に實用したのが「折伏の大化」で、その應用の實例として宣言せられたのが「四大格言」である、世には「四箇の格言」を以て、開宗の方便として、假に他を破し自を立したのだ

「五綱教判」を實用して「折伏立教」となり更に應用し來て四箇格言となる

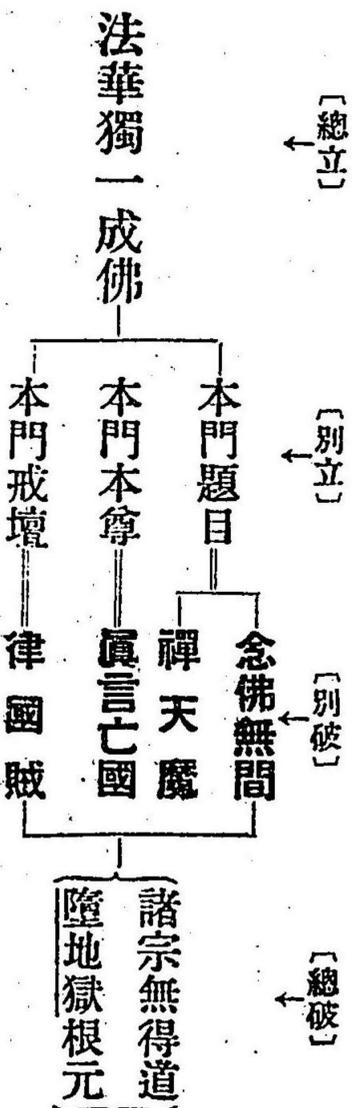
四箇の格言は悪口にあらず

武装せる教判

【四宗】念佛、眞言、律、四宗。

と誣めるものがある、宗門の學者にも、そんな風に考へ傷ねたものがある、とんでもないことである、四大格言は、萬世に渡り法界を貫いての大格言である、決して一時的の破言ではない、『五綱教判の實地應用』である、日本乃至一閻浮提のすべての宗見學見を成敗した、不磨の判決例である、勿論、開宗當時の四宗を判折したのには違ひないが、その眞意は、已に出て、今出て、當に出でんとする宗見學見、種々の妄想邪謂を破つたので、所謂「一燈千年の闇を破る」の趣向である、只「四箇格言」を以て悪口と解するのは、慈悲ある父の嚴責を仇敵に念ふのと一般で、いかんとも精けない次第である、斯る破言の中に濫えられた菩薩の血涙の那底であるかを味ツて見るが可い、今此に略して「四箇格言」の大意を述べて、その實意の在る所を示さう。

【墮地獄】諸宗はその依... 諸宗無得道... 墮地獄根元



【念佛無間】... 法然所立の念佛宗は、無間地獄の業因であるといふこと、その譯は、衆生成佛の直道たる法華經を捨てよと教へたる故、一切世間のもの、佛となるべき種を斷滅したのであるから、其罪三世十方の佛を殺したのと同じである、即ち『法華經』の明文に、『若し人信ぜずして此經を毀謗せば、則ち一切世間の佛種を斷ず乃至其人命終りて阿鼻獄に入らんとあるに準じて、『無間』と破したのである、その元意は、單



【此土の教主】釋尊は「今此三界は皆是我有なり、其中の衆生は悉く諸の患難多し、唯我一人能く救護を爲す」とて此土の衆生に主師親の職なし、養世にして主師親の職なし

に法然上人のみにあらず、一切の謗法者に適用すべき破折にして、念佛の教理が、すてに此土の教主を捨て、他方無縁の阿彌陀を念ずるといふ、佛の方便説に固執して、之を眞實とおもひ僻めたるもの故、法華經の顯はれたる後にては、方便に固執するは全く謗法罪となるのである、加之、他の佛に依頼するといふ事、法華經は難行道なるゆゑ、末法の機にあはずといふ事、菩提心を否定して本願力を主張したる事等、いづれも權理と私見との結合したるものにして、「依頼心、卑屈心、懦弱心、背本思想、厭世思想、等の惡思潮を來すべき害毒の惡見なるが故に、到底存立せしむべきものならず」と、法然を所破の標準として、かゝる邪想妄見の根を斷つべく、天下後世に大々的教訓を下したる徹上徹下の格言である。

【見性】自ら心性を見るといふ事、心性は月なり、經文は指なり、指に依らずして直に月を見るといふ也。

【佛説に依らない】「涅槃經」に「佛の所説に依らざるものは、魔の眷屬なり」と説しむ。

【禪天魔】

禪は「教外別傳」と立て、佛説の經典に依らず、

「見性成佛」と稱して、自ら恣に佛に均しとする、すべて教相の規矩を無視し、修行の大格を越えて、僭慢にも凡妄の心を佛なりと執して、佛法の規範を破壊したのであるから、苟も佛説に依らないで、自見を以て自認した上は、之を天魔の説といはねばならぬ。

これ又その元意は、單に達磨や慧可のみを破したのではない、總じて佛説を輕視するといふ觀想は、畢竟條然たる規範を、五月蠅おもふ「不精もの」考へが土臺で、自恣勝手な飄逸思想を振り舞はすのに都合がわるいから、佛説は總じて虛妄だと誣るたので、如來誠諦の言を毀謗した罪は、佛法の秩序を破壊した謗法である、又教行の規矩を脱して、僭上にも凡夫

【謂己均佛】「おのれ佛に均しとおもふ」て自惚れるの意、釋の語。  
【下尅上】下が上を尅する、即ち上を凌ぐこと。

の妄心を直ちに佛と銘じて、悟つた積りて、「謂己均佛」の慢態を演じて怪しまないのは、全く下尅上の亂心である、かくの如き放逸の思想は、世間の害毒、人類の禍根であるから、到底世に存立せしむべきものでないとして、之れを破折されたので、やはり天下後世に亘つての大教訓、萬代不磨の格言である。

【眞言亡國】……空海所立の眞言は、亡國の惡法であるといふこと、空海は「十住心」を自釋して、法華經を第三戲論と貶挫し此土の教主釋迦如來を捨て、方便權説の大日如來を本尊としたのは「此國の君主に背いて他國の主に至る叛逆」と同じことで、殊に「諸經中王最爲第一」と佛みづから説かせられたのを、第三と貶したのは、全く本師違背の謗法である、又法

【毘樓遮那】梵語なり法身のこと、光明遍照即ち大日といふと同義なり「觀普賢經」の語。

華を顯教とし、釋尊を應身の劣佛とし、「大日經」は密教、大日如來は法身の佛であると固執したのは、現に自家の祖たる龍樹菩薩が、「法華經を祕密と判じたる」にも違ひ、釋尊みづから法華經を大祕密經と宣ひ、「釋迦牟尼佛を毘樓遮那遍一切處と名く」と説かれた金言を破りたる大謗法の惡言にして、その宗旨全く佛意佛説に背きたる所立である。

これ又獨り空海所立の眞言のみならず、斯くの如き僭逆の思想は、國家の正義を害し、名分を紊り、大義を失ふ基であるから到底世に存立せしむべきものでないといふ意味で、天下後世の格言として、「眞言亡國」と判じて、正義の規範を垂れたのである。

【律國賊】……これは當時極樂寺の忍性(良觀)が、切りに律の再

【末法無戒】 乘戒の如き外部より形式の抑壓によつては、決して善力を増進するを得ざる時、根柢を削ぐれば、善根は枯れ、戒の形式は、徒らに拘泥するに至る。末法無戒は、神を亡するに由る。

興に盡瘁して、生如来とまでに尊ばれ、揚々として得意の色を爲し、佛法の眞意も時機の進退も心得ず、ひたすら時機にあらざる妄律儀を主張せるを對破する爲めに、特に此一大呵責を加えられたので、要は教の權實本迹によりて戒にも等差がある、法華經の戒は、『大王戒』にして、他の權教の戒は臣僕である、況して小乗の戒律などは、非人の様なものである。然るに法華の大王戒を蔑如して、徒らに律儀の外貌を粉飾する爲め、小乗の律を主張するは、教義に於ては既に釋尊の自判に背き、その心術は全く一種の瞞着に過ぎない、時を以て言へば、末法は無戒の時である、只法華經の大王戒のみありて、末法の大憲たるべしと定められてあるにも拘はらず、強て末法の今日に律を弘めるのは、全く佛に背いた所爲、人を

惑はす蠹賊であるとの判定。

その元意は、亦ひとり良觀のみを國賊としたるにはあらずして、一切この種の妄計を破して、末法時機相應の大道徳を光揚するの趣意で、これを破折せられたのである、そもく釋尊本懷眞實の大法たる法華經に來つて、爾前四十餘年の戒律を「正直捨方便」と捨て了り、たゞ此經を信じ此經を護れ、それより外に修行はない、それが眞實の戒であるといふて、『此經は持ち難し、若し暫くも持つ者は我れ則ち歡喜す、諸佛も亦然かなり、是の如き人は諸佛の歎めたまふところなり、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、これを戒を持ち頭陀を行ずるものと名づく』と宣言せられた以上は、法華經受持の外に戒は無い筈である、これが根本の戒たると共に、また

【頭陀】 梵語なり持擻（とさう）と譯す、煩惱の塵垢をふるひのける義なり、十二頭陀といふ事あり、要するに戒律を守りてその行の清淨なるをいふ。







# 第二篇 宗旨

## 第十四章 宗旨三秘ノ總論

### 一 三大秘法ノ名義

#### ●●● 三大秘法

「本化妙宗」の宗旨は、全く「三大秘法」である。

- 一に 本門の本尊 一乘妙法蓮華經の本體 (本佛の實體)
- 二に 本門の題目 一乘妙法蓮華經の信念 (本佛の正智)
- 三に 本門の戒壇 一乘妙法蓮華經の實行 (本佛の妙相)

この三ともに「本門」とあるのは、この妙義が佛教中ひとり「法華經本門壽量品の教義より出たもので、普通佛教と撰を異にして居る趣を示す對判の意で、「權教」に擇び、「迹門」に擇んで、特に「本門」と

【對判】權教や迹門の教と異なる旨を、この「本門」の二字にて拂ひ對する爲め、一々に「本門」と冠稱する也

隠れて見えざる深き法  
 隠して見せざる貴き法

【神通】神通は不可思議なるはたらきを云ふ、佛の力は善法を説く事、護る事、人を善法に入らしむる事、人に於て發達の爲に、故に衆生教化の爲に、長きはし之を示すことあり、又之を隠し大を隠し、又之を顯すに道に利あるを見て、その態不可思議なり、行要願

冠らせたのである。

「三大秘法」とは「三箇の大なる秘密の法門」といふことで、「秘密」といふのは、「隠れて見えない」といふ意と、「貴いから容易に示さない」といふ意味との二つがある、つまり「平凡ならざる深い法門」といふことである、その本據は如來みづから法華經の大力用を提擧して

『如來秘密神通之力』(如來壽量品)

と仰せられた、この「秘密」といふことが、即ち「三大秘法」の基く所である、この文の「如來」に就て、「三身」といふことがある、

- 一に 法身如來 無作本有眞理實在の本體
- 二に 報身如來 無作本有受用法樂の智性
- 三に 應身如來 無作本有應化益物の慈相

【釋】「文句」九の文なり

この「三身」が常住であるといふことを説いたのが、「秘密神通」といふことである、故に天台大師は之を釋して、

『一身即三身ナルヲ、名ケテ秘ト爲シ、三身即一身ナルヲ、名ケテ密ト爲ス、又昔シ説カザル所ナルヲ名ケテ秘ト爲シ唯佛ノミ自ラ知ロシメスナ、名ケテ密ト爲ス』

と言つてある、『一身でありながら、それが三身を具へて居るといふのが、秘妙の理であるから、これを「秘」と爲し、『三身とあつても、その本は一つである』といふ處を「密」といふのであつて、その「三一相即の不思議なるさま、いかにも凡智凡情の測り知る處でないから、稱して「秘密」といふたのである、又法華經已前に於て、會てこの三身即一體俱用(互ひに體と爲り用と爲る義)の理を説かないから、それが「秘」である、説かないけれども、佛に在りては

【三一相即】一體の上  
に在る三用なれば、三各別  
のものにあらず、其體も「  
ばたらき」も俱に融即して  
一なり。

【法の上】佛の一體に三  
身といふ資格の故、三一  
相即なり、而してその佛の  
「さとり」佛の「意思」佛の  
「所作」を説示すに就き、佛の  
の三身即一の意匠に則つて、  
それを「教法」に仕立上げた  
るがこの三大秘法なり。

【三菩提】眞性、實智、方  
便の三。

【三德】法身、般若、解  
脫の三。

「唯獨自明了」とて、御自分には明かに照知照見せられて居るから、それが「密」といふのである、今この三身即一の秘密を、法の上に詮し來て、「三大秘法」と建てたのである。

一佛の三方面は即ち三の固有資格である、然れどもこれは單なる佛の上にての話である、若しこれを法に引き直せば、「三菩提」とか、「三德」とかになる、今單の人でなく、單の法でなく、全く複製的に人法の調製せられた點を、教理的實用に仕立て上げたのが「三大秘法」の宗旨といふので、乃ち「法」より「教」、「教」より「宗」と、順次實際的に顯示したのである、扱て一言に「三秘」を總提すれば、

「本門の本尊」……とは、『法華經壽量品』によりて顯はれた「法界唯一の至尊たる久遠實成の本佛」を本尊として、吾人の絶對歸依處と定むべきものであるといふことを教ふる法門。



【護念】 妙法を「佛所護念之法」といふ。

【鼓舞鞭撻】 吾聲にて吾心を刺激する爲めに、口に唱ふるの要あり、心に命令し、身に命令するの意なり。

【開點】 開合點脈の端なり、の底の妙能を發揮する事。

「本門の題目」……とは、法華經の名に含まれたる深重廣大なる意味、その中には佛の智慧が籠り、佛の護念の約束が籠って居る、その妙名を唱て、佛の智慧と慈悲とを感じ起す所の行法とする、口に唱へるのは、『心に念じ身に行ふことを鼓舞鞭撻するの謂』である、凡そ人の思想も言語も行動も、一切みな此大法の靈化の下に開點せらるべきものであるといふことを教ふる法門。

「本門の戒壇」……とは、『法華經を奉ずるの外、何ものをも信ぜず持たず』といふ誓を立て、それを實行する作法が「戒法」で、その「戒法」を受ける戒場が「壇」で、これは國家の一致力と活動力とを以て建てべきもので、あらゆる國家的威力勢力の一切を集中して妙法の宣傳護持に任すべく、王法佛法の契合融一して、正法の威力を地上に實現すべきものであるといふことを教ふる法門。

【三方面】 妙法五字の「體」が本體、「性」が願目、「用」が戒壇と、「法」の三方面を發するなり。

【能所】 「教判」は能發、「宗旨」は所發。

宗は鑛物の如く、教は鑛山の如し。

この「三大秘法」は、悉く「妙法蓮華經」の五字を體とするのである、即ち一法の三方面といふことである。

### 二 三秘ト五綱トノ關係

この「三秘」は宗旨、前の「五綱」は教判、教判で宗旨を見出すのであるから、その關係は能所である、即ち五綱の教判で精密嚴重にしろべあげると、法華經本門の實義といふものが詮し出される、その信じ方、修行の仕方、その弘まるべき時、建てらるべき國、持ちて益をうくべき人、持ちて益を得たる姿、此大法の顯るべき因縁次第等、すべて「五綱判」から割り出されて来る、故に宗(三秘)を鑛物とすれば、教(五綱)は鑛山の如く、宗(三秘)を精金とすれば、教(五綱)は採鑛冶金術の如きものである。

### 三 三秘ノ原據

【開説の式】 理義を組立て、人に説示する辯明上の方式。

「一」は黙の形  
「二」は説の形

【兩極】 姑く左右の二にて、元と無對比の二より始めて「左」と「右」との二方を指點すれば、

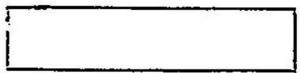
一法に三面あることは、蓋し「開説の式」とでもいふべきものであらう。一つのものを理義を分けて示し始めると、必ず「三」の數になる、又「三」の數に出ても、理義も分明になるのである。「一は三を生じ、三は萬物を生ず」など、言ひ傳へて、古來事物の安住し照應する定數としてある、早い話が、「一」は無相の數で静止した形である、「萬物の端首であると共に、亦萬物の終りである、「みづから照らして他に説かない形」である、然るにこの「静止點」より動き出して、みづからの内容を説かうといふ時、先づ上とか下とか、又は右とか左とか、兩極を指示するに及んで、始めて「二」の數となる、ところで此の二の數を爲した時、モハヤ既に「三」の數を

「一」轉じて「二」となる、更に其左と右との中間を指せば、始めて左、右、中間の「三」となり、乃ち「二」轉じて「三」となるなり。

爲して居るのである、いかんとなれば一たび彼れと此れとの兩數を爲せば、勢ひ必ずその兩極の「中間位」を生ずるのである、其中間を一つと取れば、前の兩端と共に「三」の數となるのである。

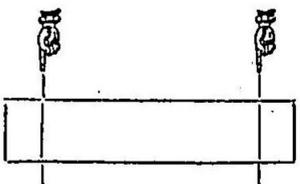
(位の分未)

〔一〕



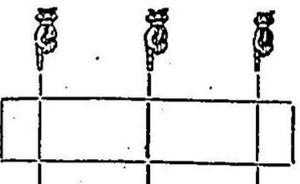
(位端極兩)

〔二〕



(位生間中)

〔三〕



三は顯理の原則數なり

事物を分別するに就て、「三」といふ數は、たしかに「整」「平均」「活動」を意味してある、故に之を「顯理の原則數」とする。「二」では答み過ぎて判らない、さりとて四五六七十百千萬と擴げたのでは際限がない、煩ならず蒙ならず、極めて「程のよい數」と

いへば、古來何の道の説明でも、必ず「三」に約してある。

【同類】 人と人、法と法とは同類なり、「三智」と「三般若」との如し。  
【類例】 人を法に類し、法を人に類するは類例なり。「三身」と「三徳」との如し。  
【相翻】 法身、般若、解脱の「三徳」を、反對なる煩惱、業、苦の「三逆」に對類するが如し。

「天地人の三才をはじめ、智仁勇の三徳、上中下の三品、日月星の三光、主師親の三徳、耶蘇には三位一體を説き、日本には三種の神器」を傳ふる等の類枚舉にいとまあらざる程ある、翻つて佛教に入つて見れば、さすがに理義最勝の教法だけ、三法開數の法門は、實に夥しいことである、而してこの三法が各門各種さまざまなるに拘らず、その内容に自然の「共通點」がある、「同類的」にあるか、「類例的」にあるか、將又「相翻的」にあるかの異はあらうがとにかく互に照らし合つて居るのである、故にこれを「三法類通」とも言つて居る。

その種々なる「三」の數で顯はした諸法門の中で、尤も原則的なのがことに此の三大秘法に就て、佛の三身である。

身とは「かたまり」なり。法身は「眞理のかたまり」、報身は「智慧のかたまり」、應身は「慈悲のかたまり」。

【宛然】 一つものなれども、三様に現れて、その一々が互に混淆せず、宛然として三は三なり、その宛然の三が、相離れざる故に妙なり。

一の佛に三の身、「身」とは「積聚」の義といふて、無相界の勢力より有相界に凝結して一定の範疇を爲したる資質をいふのである、尤も有形と無形とに亘る。

「法身」といへば、本法眞理が意識的に結晶したといふような場合で、早くいふと「眞理のかたまり」である、「報身」といへば果報の身といふことで、これはその眞理の身に自然にその理を照らす智慧があつて、その「智慧のかたまり」といふような理合、「應身」とは、物に應同して他を導く身、即ち「慈悲のかたまり」といふようなもの、この「三」の資格が、その「三身」の内の一身の那にも、皆相具つて居る、それがそれだけの必要に局られる時は、離れも合ひもするよりに思はれる、その實體は離れもしない、新しく合ひもしない、常に合つて常に離れて居る、三身宛然として混淆しない

【理體】 理といへども、  
事理相對の理に非ず、眞理  
の本體といふ義なり、若し  
事理相對して、本化の觀道  
に從へば、その所謂理は、  
須らく「事」と目すべきなり

【理義情致】 單に眞理  
を照知するのみに非んぜず  
進んで人を教へ物を化す  
に理義を究めたる上に人  
の情をも活物と利導する  
波らさば、活物を利導する  
こと能はず、即ち人に臨む  
居るときは、理も情も行波り

歷々分明に三の別がある、さりとして「三」が決して別種のもの離れた  
ものではない、「一」の上の「三」である、例へば「法身」は死なない、「應  
身」は壽命に限りがあるが滅するにあつても、その死なない身が「法  
身」示した「應身」であるから、應身もヤツぱり滅しないのである、  
滅する應身に即して不滅の法報二身がある、即ち「應身」に即する  
「三身」である、他の二身もこの通り、理體、智體、慈體、一の中の  
三、三の中の二、いづれからも離すことが出来ない、さりとして理  
義井然として一糸紊れずに、「三身」おのゝその趣を別にして居  
る、この調子が何とも言へない妙味がある、乃ち天地の至法を顯  
はすに、天地の至美を以てしたものであらう。  
今「一乗妙法蓮華經」の根本大法を、理義情致の周到せる「乘法」  
として、宗旨的に建設するといふことに就て、元來宗教の大目的

經に「若有能持則持  
佛身」とあり能く持  
つとは人が法華經を  
持つなり法華經さへ  
持つれば則ち佛身を  
つに成るは法華經  
は即ち佛、佛は即ち  
法華經なるが故也。

は佛陀で、歸向所も、模範も、結歸も、佛陀を離れては全くの無  
意義であるから、原則をこの「佛の三身」に取つたのである、「本尊」  
は元よりのこと、「題目」も佛の智慧を持つのである、「戒壇」も佛の  
妙相を取るのである、「三秘」も佛を離れることは出来ない、「三  
秘」の期する所も、その佛に成らうといふのであるから、上から見  
ても下から見ても、要するに佛を豫想しての修行なり信仰なり法  
門なり教理なりである、「佛身の三資格」を、宗法に複寫して、「三  
大秘法」を立てたのである。  
信仰した上は修行するといふ順序が、全く學問的形式ゆゑ、宗  
法の三條件を「三學」と名けたのである、即ち戒と定と慧との三であ  
る、苟くも宗を立てるには、必ずこの三條件を具備すべきものと  
究つて居る、而してその宗々によりて、いかなる戒、いかなる定



### 本門の本尊

【本來】「本來尊重」の義、  
「根本尊崇」の義、「本有尊  
形」の義等ありて三身に配  
すなごいへど、義理は大約  
同じことなり、要するに人  
より手をつけいへざる法  
にして根本無限の尊貴なる  
ものといふことなり。

鰯頭信すべし論  
法には狐を禮拜する  
も無理ならず鰯も狐  
も尙可なり唯正法を  
連座せしむるに忍び  
ざるなり

## 第十五章 三秘各論ノ一「本門ノ本尊」

### 一 久遠本佛ノ正體

「本尊」といふことは「根本より尊いもの」といふことで、ある意  
味から尊くした、若しくは尊く思はしたものでない、他から造り  
立てずして、自然に本來より尊き體となり居るものを指すので、  
宗教上に本尊を要するわけは、この本來より尊い無上の境界に對  
して、絶待の歸依信仰を捧げる、その信念の力に、無限の力用が  
ある、この力用が宗教の價值のある所で、その力用の發すべき信  
を成立させるのが本尊である、よく世の諺に「鰯の頭も信心がら」  
といふことをいふが、いかさま信の力で鰯も尊くなることか有り  
もしよう、けれどもそれは信の方から鰯を尊くしたので、鰯のお

【崇高の情操】 倣すべ  
からざる「けだかきこころ  
ば」を云ふ。

陰で信が起つたのではない、そういふ信も無いことはないが、そ  
れは一種病的信念で、世にいふ「迷信」の類である、狐を拜んだり  
蛇を拜んだりする連中は、みな此鰯系を引いたのである、眞誠の  
宗教では、斯くの如き情けない信を要求しない、動ともするとこ  
の鰯系の信を以て、法華經の信を説明しようとして居るものもあ  
るが、それ等はまるで「犬猫の食物で人間を饗應すべし」と説くと  
一般である、要するに本尊とすべきものが正しくなければ、信も  
隨て正しくは起らないのである、本尊と信仰とは切つて切れない  
關係のもので、「正しい信」とは、一つは「正しい本尊」を信する信  
の事をいふので、「本尊」が正しく崇高なれば、それを信する所の  
「信」そのものも、任運に正しく崇高の情操を發揮するのである、  
「本尊」と「信」とは互に相發し相長けるので、どちらが先どちらが後

【適法】 如法といふに同じく、信仰の本尊のといふても、宗法の規定に背いては何の効しなし。本尊の動相も、本尊に對する信念も、ともに適法ならしては、本尊修行俱に反古となるべし。

須らく本佛の信を起すべし。鰯の信狐の信を要せざる也。

といふことはないが、本末をいへば、「本尊」ありての信でなくてはならぬ。「本尊」そのものが吾心に發揮したのを「信」といふので、適法に「本尊」に歸依同化した場合の一刹那に發生する「根本心の發動」であるから、「本尊」に歸依せざる已前に發生すべきものではない、果して然らば「正しき本尊」を擇ぶの要はいふまでもないことである、心の中には淨いものも汚いものもいろくさまとある、それが外界の對縁によりて淨くも汚くもなる、淨いものに接すれば淨い心となり、汚いものに接すれば汚いものとなる、高い方をいへば、最高最尊の佛陀と同じ部分もある、低い方をいへば、畜生よりも下等な地獄の心さへある、所對の如何によつて、どちらでも出る、最高最尊の本佛に接すれば、必ず「本佛の信」が起る、狐や蛇や鰯を拜めば、やはり爾ういふ類の信が起るのである、そ

【壽命】 壽命は身と心との一切を含むのみならず、果報の精なる故、功德を算するに壽命を以つてする也。

【因果】 因果を離れて佛法の道理なしと立てるが佛の教理なり、只因果に小乘と大乘との異り、權教と實教との異り、殊に本門と迹門との異りあり、今は本門の因果を正とす、即ち本因本果なり。

れであるから、身體に養生の必要なるが如く、心には信念の修養が必要である、而して修養の先決條件が「吾人は須らく最尊最上の本尊を奉ずべし」といふことである、而して今この法華經本門の實義として説き顯された、「久遠實成の本佛」といふのは、法界眞理の原動力ともいふべき大精靈の德體にして、形から言ても、力から言ても、はてしのない廣大無邊のものであるから、壽命を以て其の功德の一切を代表顯説して、「三身常住、無始無終」といひ、而かもそれが無責任の不可解的誇張談でない、「つとめるだけつとめて得る」といふ因果の大法則によりて成立して居ることを示して、「久遠實成」といふので、「久遠」とは、「限りなき遠い古」といふこと、「實成」とは「ちゃんと規則通りの修行をしてそれに酬ひて得たる鎗先の功名より來つた功德」といふことで、何の因もなく始





### 無限の活動

衆妙の「根本妙」とするのである、眞、善、美、といふけれども、「眞」とばかりでは善と美とを含まず、「善」とばかりでは眞も美も含まず、「美」とのみでは眞善の二を兼ねないから、つまり麤法たるに過ぎないが、若しこれを「妙」と稱する時は、「眞」も「善」も「美」も一切悉く備り罄くして、一點の缺目なく、癢い所へ手の届くように、すべての意義も情味も兼ね備りて、而かも無限の活動を意味して居る、故に法華經では、大といふべきを「妙」といひ、眞といふべきを「妙」といひ、善といふべきを「妙」といひ、美といふべきを「妙」といひ、淨といふべきを「妙」といひ、自在といふべきを「妙」といひ、安樂といふべきを「妙」といひ、極といふべきを「妙」といひ、圓といふべきを「妙」といひ、その外威嚴、平和、光明、正確、調和、融通、具足、圓滿、凡そあらゆるよきことのすべてを、調

「妙」の字は若き女のもつれ髪いふにいはれずとくにとかれず」

●判(破邪的)  
開(顯正的)

### 潜妙を摘發す

和的に具有し發揮する呼吸を「妙」と稱したので、本義は不可思議といふことであるが、要するに「何とも言ひ得ざる美味を具へた極めて正しい法」といふ意に歸着する、これに「判」と「開」の二つがある、「判」とは諸の妙でないものを「麤」といひ、この麤と相對して一々にこれは「麤」これは「妙」と仕分をすること、「開」とは妙でないものゝすべてに、皆妙の分子が潜み居るものとして、そのやがて顯はるべき「潜妙」を摘發允認して、おのゝその極眞を發揮せしむること、閉ぢられてあるものを開くといふ意味になる、凡夫でも佛の分子を有して居るから、それを摘發すれば、釋尊と同じ佛になるに相違ない、たとひ何かの事情で、全部その通りに成り得ないとした所が、常にそれを心懸けて居れば、いつしかその通りになる、まるで成らないまでも、幾分の進歩は必ず有る、こ

【向上的態度】 自然に上へと進み行く徑行ある進歩的意味。

社會主義あり自然主義あり世を壞り人を墮落せしめずんば已まざらんとする可證哉

【骨子】 即ち三妙は、十妙中の骨子にして、根本なるが故に衆妙これに攝するなり。

△本門本尊——本果妙  
△本門題目——本因妙  
△本門法要——本國土妙

れが**向上的態度**といふのである、この**向上的方針**をすこしても外れると、人間はどこまで**墮落**するか了らない、**墮落**を理想とする主義もあるようだが、それは「ヤケになつた人間が無法をする』のと同じ**度合**のもので、元より論ずるに足らない。

**法華經**の命といふべき、この「妙」の一字は、即ち亦**法界萬法**の**根本的性命**である、これを**本門壽量**の説會に於て、**十箇の要點**を擧げて、**妙の妙**たる所以を示した、それが「十妙」で、その中の「三妙」は亦この「十妙」の骨子である、「**三大秘法**はこの「三妙」を宗教的に彰はしたものであつて、「**本門本尊**」は即ち「**本果妙**」の證得である、即ち「**本門題目**」の「**本因妙**」に對する證得の體であるから、「**本果妙證**」といふのである、即ち**妙法蓮華經**の五字は一面**本因**の修行であると共に、一面その**德體**たる**本果證得**の**主體**である。

### 三 本門本尊ノ尅體及ビ形相

#### 其一……本尊ノ圖式

久遠**本佛**の**實體**として、「**妙法五字**」は理の上の名體であるが、**事實上**の尅體は、即ち「**十界**を**圓滿**に具足した姿」である、故に中央に「**南無妙法蓮華經**」を大書して、その左右三段に、上は「**釋迦佛**」「**多寶如來**」等の**佛界**より、下は**人畜鬼界**に至るまで、**十法界**のすべてを列ね、その**十界**が悉く中央の「**妙法蓮華經**」に**朝宗**し、且つそれに照らされて居る姿を圖し顯はしたのが、「**本門本尊**の**妙法曼荼羅**」である、その形式に就て、「**文字曼荼羅式**」と「**形像式**」とがあるが、**文字曼荼羅**が正式である、**形像式**には、「**一尊四菩薩式**」と「**二尊四菩薩式**」がある、今の**木像勸請**はこれから變化したものである、先づ**根本的正式**の**圖形**を示せば

【十界】 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、(以上六道) 聲聞、緣覺、菩薩、佛(以上四聖) 合して十界、詳くは後に在り。

【十法界】 十界のことなり

【一尊四菩薩】 一尊は釋迦佛、四菩薩は、上行、無邊行、淨行、安立行。

【二尊四菩薩】 二尊は釋迦多寶の二佛、四菩薩は前に同じ。



諸佛聚の名は相也功  
德聚の名は性也輪圓  
具足とは用也妙法曼  
茶維は體也綜譯して  
淨壇といふは淨は正  
報に約し壇は依報に  
約す

【主尊の光】 中央なる  
妙法蓮華經の光明に照らさ  
れて、本來固有の功徳を喚  
び出される組織ゆゑ「妙  
の尊形」なる是を本尊と  
申すなり」と祖列にあり。

には所有る尊い佛菩薩等を祀り請じてある處ゆゑ、亦之を「諸佛聚」ともいひ、その諸佛諸尊に功徳が充ち盈ちて居るから「功徳聚」ともいふのである、而かもその各種各様の佛菩薩等の諸尊諸功徳が、互に相照らし合つて、環の端なきが如く、圓かに相融し相具して圓滿なるゆゑ、亦義譯して「輪圓具足」といふ、この外また種々の譯があるけれども、つまり、「本尊さまを祀る壇」といふ事が形體で、「功徳聚又は輪圓具足」がその義である。

今十界の諸尊形が悉く一大妙法の下に統綜せられて聚り會した容は、宛然「十法界のあらゆる功徳勝能を聚めて其威嚴尊特を認めたる姿」であつて、それが其一一の孤立的位地よりせずして、「中央主尊の光りに包まれての上で尊い」といふのが、この本尊の主眼とする所、この意味を失つたならば、佛でも菩薩でも究竟の

【絶縁】 國を治めるには  
要なれども必要執達更も必  
要なれども、さりとして此等の  
諸官が、大權の光りを持つこ  
とを、孤立的に其尊嚴を離れ  
るとは、出來ざるなり、若しも  
大權の外に立たんとするも  
りのあらば、それ直に反逆な

能力はないものとする、況してその已下の天や神や人畜鬼趣の類に至つては、全く無功徳なる上、場合によりては毒害の本となるのである、即ち「中尊」は譬へば「天萬乘の君の如く、その左右の「諸尊」は百僚百官の如きものである、大官小吏おのゝ必要で、どれ一つ無くても事を缺くのであるが、さりとして君主より離れて立つことは出來ない、若しも君主より絶縁して其能力を發揮しよるとなれば、是れ明かに叛逆にして、天下大亂の基である、十界の體用力作、悉く中尊妙法の光に映らされての上に、その各自の徳性を發揮すればこそ、「本末究竟等」の整束を見るのである、故に中尊を透しての互具調和でなければ、「輪圓具足」でもなく、「功徳聚」でもないことになる、而して中尊の妙法五字は、正しく「久遠の本法」を體とし、「久遠の本佛」を性とし、「未法の要法」を用

として、『法の名』に依て顯されたる『本佛の體』であるから、法界萬有の功德が一切すべて本佛の程度に發揮された形相として、斯く圖出せられたのである。

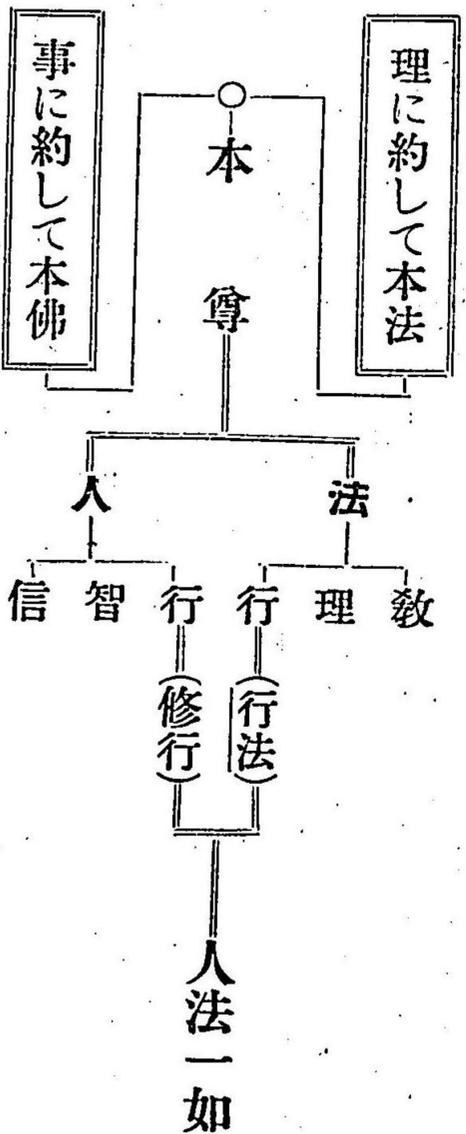
其三……本尊ノ事理人法

中央の『妙法蓮華經』は、法界の中心主體を示し、左右排列の諸尊はその妙用を示し、法と人とが理の上に一致し、事の上に調和した『功德團』であることを彰はしたもので、單に法から言へば中央は眞理の體であるのだが、その眞理に無限の靈力即ち功德力がある、それが人格的に顯はれた佛陀であるから、功德點より「本佛」と稱し、理體點より「本法」と稱するも、その「本法」の内容は本佛であり、「本佛」の内容は本法で全く「人法一如」である、本佛本法の上の一如は、また即て本尊と吾等行人との上に於ける「人法

理上二致  
事上调和

【功德力】法は眞理にて  
もこれに功德といふ原動力  
が加はらざれば、眞理の制  
裁に血なき道理なり、功を  
積み徳を累ねるといふこと  
は、正しく人工的なり、こと  
の人工的眞理作用が、固有  
の眞理に一如せる呼吸を要法  
といふなり。

一如」となるべき原則であつて、信と行との媒介によりて、吾等の「人」はいつでも本尊の「法」と一つになるべく仕掛けられてある



【行法】行すべき法、即ち「所行の法」これ也、修行といへば、能行をも含む故、これは人に屬するなり。

理名と事名

功德の上から之を本佛として中尊の尅體を定めることは、『本門壽量三身常住』の教旨に順つた稱呼で、一口に「本門の教主釋尊」と言ふのである、然るを「南無釋迦牟尼佛」と書かずして、「南無妙

個體稱を避け  
本體稱を取る

【多寶】 梵には包休爾羅佛東方寶淨世界の教主菩薩に於て法華經證明の爲に發來りて前の迹門を爲し後の本門を起すの迹門を證し明佛の法華經に取ての化を證

法蓮華經」と書いたのは、前にいふ「理の上の名」を取ったのである、所謂妙法は本佛の「理名」で、本佛は妙法の「事名」である、故に「無作三身ノ寶號ヲ南無妙法蓮華經ト云フ」御義口傳とあつて、これは佛の「本體稱」であるとの意である、今一切の佛菩薩の本地を開發して、諸乘を歸一するの必要から、最大普遍的にして且つ原則的なる本體稱を取ったのは、その釋迦といひ多寶といふ如きは、元來「個體稱」であるため特に之を避けたのである然かし本門壽量の說會に於て顯はれた、所謂「本門の教主釋迦如來」は、名は個體稱の釋迦でも、その實體は既に超個體的で、何佛何如來と數ある中の一佛でなくて、法界萬法功德の根元、一切の諸佛の惣本體で、たゞの一如來でない、故に諸佛の本體名なる「妙法蓮華經」といふ絶對眞理の名を以て其名とせねばならぬ、即ち

【邪說曲論】 古來本尊の事に就て種々の學說論議ありたりといふ論評近來まで盛なりしといふこともその一邊を取るといふことは未だ整理の談にしては強て之を骨張する時は邪說曲論となるなり。

釋尊二あり説きたる釋尊と説かれたる釋尊是なり

その實體を指す時、之を「本佛」といひ、その公稱を表する時「妙法蓮華經」と言ふのである、然を佛の外に法を認めたり、又は法を無視して佛を取るなどいふ、所有る葛藤は悉く邪說曲論である、一言にして之を決すれば

『妙法蓮華經の名で顯はした本佛』

といふことに歸着するのである、詮し來ると釋尊が二體あることになる、即ち「説いた釋尊」に「説き出された釋尊」である、「本より述を垂た釋尊」と、「迹より本を顯した釋尊」とである、即ち本門壽量の時の釋尊は、これまでの釋尊と全然別趣の觀がある、眞に天淵月籠の相違である、ところが其れが同一體であるといふ事で、多くの佛弟子が臆を潰して眼が覺めたとしてある、「人間の子と生れて、當前に學んだり鍊ツたりした結果、ヤツと悟りを開いて佛



【色香味】色は本門戒壇香は本門本尊、味は本門題目なる事を知り、惟法外道凡夫の妄想邪心を翻へしてこの唯一の正法に服従することなきことなり。

【轉謝】その意を轉じてその事を謝絶する事。

【組織的】佛の法も佛の智慧も佛の慈悲も衆生の信の接受法も、教行人理の信切が、すつかり揃て、活動的に仕上げられたる完全なる形式。

悟シ、乃チ此藥ノ色香味美キヲ知テ、即チ取テ之ヲ服スルニ、毒ノ病皆愈ユ其父子悉ク已ニ差ルユトヲ得ツト聞テ、尋テ便チ來リ歸テ、咸ク之ヲ見セシム(如來壽量品)

以上の經文いづれも、佛は滅せざるもので、久遠よりの佛である常に説法教化して居る、唯「人が餘りに忤れるによつて粗末にするから、それを轉謝する爲に方便で滅つて見せる」それが爲め懲りて佛を慕うような心が出て来て、佛の教に従ふようになれば、いつても其もの、前には「ソラこゝに居るぞ」といふて出て遇うて遣る、但し外の場所では遇はない、必ずこの「妙法蓮華經」の名の下で逢はう、此法を以て「佛は衆生を護念する、衆生は佛を感起する所の手形」としより相圖としよう」との約束である、その全部の機關を組織的に描寫したのが、この「妙法蓮華經」の形相である。

其四……本尊ノ座配

必しも大必要といふ義ではないが、會得領解の助けとして、本尊の座配に就て一言して置くことがある。

尤も是には古來「相承書」と稱して種々の傳へがあるが、多くは牽強附會の俗説であるから、それ等の舊説には關らず、専ら達意的に解釋するつもりである。

先づ「曼荼羅」の惣體を、中邊の二に大別する時は、即ち「中尊」と「列衆」との二部となる。

「中尊」の南無妙法蓮華經を「惣」とし、「列衆」の諸尊を「別」とする義分もある、又「中尊」を「體」とし、「諸尊」を「用」とする義もある、要するに「中尊」ありての「諸尊」であるとの意である、又「佛部」「蓮華部」「金剛部」の三部に配當する義邊がある、「曼荼羅」中の第一段

【牽強附會】「こじつり」といふ事、古來の本尊相承書中、筆法點齋の口傳相承類には、往々「こじつり」あり、悉くは信すべからず。

【中邊】「中央」と「はじ」となり。

【座配】本尊圖形に就て諸尊の位階配列。





其五……本尊ノ依文

「本尊」に就ての本據は、第一經文に於ては

『如來秘密神通之力』如來壽量品

の文を、『無作三身の依文なり』と訣し、これを本尊の原理として三身常住無始の古佛を顯はすが「本尊」なりと宣べ、更らに

『時ニ我及ビ衆僧俱ニ靈鷲山ニ出ツ』(全上)

の經文を以て「本尊儀相」の本據とするのである、乃ち

【靈山一會】 釋尊法華經法の時のあつたりを其能再現するの意

靈山一會儼然未散ノ文也、時トハ感應末法ノ時也、我トハ釋尊

及トハ菩薩、聖衆ヲ衆僧ト説カレタリ、俱トハ十界也、靈鷲山

トハ寂光土也、時ニ我モ及モ衆僧モ俱ニ靈鷲山ニ出ツル也、秘

スベシ秘スベシ、本門事ノ一念三千ノ明文ナリ、御本尊ハ此文

ヲ顯シ出シ玉フ也(御義口傳)

本佛不滅これ本尊の原據

「本佛が常住にこの土にまします」といふことによりて、本尊の根本は立つのである、「信念妙行の前には、いつても現在前する」といふので、本尊の儀相は明かになるのである。

十界宛然圓妙具足の本尊は、遠く雲のあなたの空理空談でなくして、正しくそれが事實の上の國家人生に打ち建てらるべく、理

談より實際へ顯はれる様の仕組みに建立されたのである、故に經文に「此娑婆世界」とあり、「靈鷲山」とあつて、實地界を指して

ある、猶一層的切に解して

時トハ末法第五ノ時也、我トハ釋尊、及ハ菩薩、衆僧ハ二乘俱

トハ六道也、出トハ靈山淨土ニ利出スル也、靈山トハ御本尊也

今日蓮等之類南無妙法蓮華經ト唱へ奉ル者ノ住所ヲ説ク也云々

(御義口傳)

【理談より實際】 教法は元と理想を定規として、人の誤謬を定規として、故勢の誤謬を定規として、の結果、往來論が主となる、の傾向あるに實際に遠ざかる、の教はこの理談を以て、本化の教に於て、事實的、唱導の上に移し來て、事實的

中にも日本國なり

【瑜伽論】彌勒菩薩の論  
【種姓】大乘種姓とは大衆を信し行すべき人種。人を本尊化し國土を本尊化し世界を本尊化し法界を本尊化し以て本尊化せる佛と法とに歸結して本尊及び信仰の能事畢矣

單刀直入に、吾等行人の住所を指して本佛の住所と爲し、尙今一層的確に

惣ジテ一乘南無妙法蓮華經ヲ修行スル處ハ、如何ナル所也トモ、常寂光ノ都、靈鷲山ナルベシ、中略 本有ノ靈山トハ此娑婆世界也、中ニモ日本國也、法華經ノ本國土妙娑婆世界也本門壽量品ノ未曾有大曼荼羅建立ノ在所也云々、瑜伽論云東方ニ小國アリ其中唯大乘ノ種姓ノミアリト、大乘種姓トハ法華經也、法華經ヲ下種シテ成佛スベシト云フ事也、所謂南無妙法蓮華經ナリ、小國トハ日本國也云々(日向記)

これ國土を本尊化するの深義を明かしたものである、「國土の成佛」といふのが其れである、人に就て言へば個人をも本尊化するのである、それが本尊の目的である、これを爲すのに、「本門の題

目」と、「本門の戒壇」との二つが要る、その二つで圓滿に信と行とが成立つ、それが成立つて始めて「本尊」がものをいふ事になる、「三法一體の妙旨」に由るのである。

「本尊」は元と眞理の標式であるから、法界的である、小サク言ツても世界的である、故に世界統一のためには、先決條件としての第一標式である、即ち世界統一の旗標である、而かもその「世界的の本尊」が、特にこの「日本」に建つといふことに就て、多くの因縁や理義が存して居るのである、即ち

『一閻浮提第一ノ本尊、此國ニ立ッベシ』觀心本尊鈔

世界と日本との關係、日本と妙法との關係、尋常にあらざるものと爲せる本化の大判を窺ふことが出来るであらう。

而して本尊の尅體に就ては、いづれも本門の教主釋尊として、

世界統一の標

世界統一の事は後に詳し

それを「妙法蓮華經」の名の下に表彰する趣を示されてある、左に二三の聖判を示す。

【本時の娑婆】 久遠の本時を顯はしたる説會なる故、同に娑婆にても、凡見の土に非ずして、その資格が本佛の淨土たる娑婆なるを本時の娑婆といふ。  
【迹化他方】 迹化の菩薩と他方の國土より來れる今入りの菩薩。  
【雲客月卿】 は堂上人ないふ、即ち「公家」の事なり。

其本尊ノ體タラク、本時ノ娑婆ノ上ニ、寶塔空ニ居シ、塔中ノ妙法蓮華經ノ左右ニ、釋迦牟尼佛、多寶佛、釋尊ノ脇士上行等ノ四菩薩、文殊彌勒等ハ四菩薩ノ眷屬トシテ末座ニ居シ、迹化他方ノ大小ノ諸菩薩ハ、萬民ノ大地ニ處シテ、雲客月卿ヲ見ルガ如シ、十方ノ諸佛ハ大地ノ上ニ處シタマフ、迹佛迹士ヲ表スルガ故也、是ノ如キ本尊ハ在世四十餘年ニ之ナシ、八年ノ間ニモ但ダ八品ニ限ル(觀心本尊鈔)

右の聖判は、名に負ふ「妙宗本尊の根本儀軌」ともいふべき「本尊鈔」の指南であるから、解説の模範も一にこれに遵はねばならぬのである、文に「塔中の妙法蓮華經の左右に釋迦牟尼佛多寶佛」云々

とある、即ち「中尊妙法蓮華經」のことである、それを後の文に至て「壽量品の佛」と指し、又「此佛像」と呼びたまへる所を以て、これその内容の「本佛」なることが知れる、單に之を佛とのみ呼びたまへるは、「報恩鈔」に「三祕」を釋する時

「一ニハ日本乃至一閻浮提一同ニ、本門ノ教主釋尊ヲ本尊トスベシ、所謂寶塔ノ中ノ釋迦多寶、外ノ諸佛、並ニ上行等ノ四菩薩、脇士トナルベシ」

とあり、又「三大秘法鈔」にも  
「壽量品ニ建立スル所ノ本尊ハ、五百塵點ノ當初ヨリ已來、此土有緣深厚、本有無作三身教主釋尊也」

とありて、直に内容を的指して本佛たることを示されてある、而かも是れ皆妙法蓮華經の名によりて顯はすべきであるといふこと

【外ノ諸佛】 寶塔の外に居る諸佛、即ち十方世界より集會せる諸佛。

【能生】 能生は所生に對し、生み出されるものに非ずして、生み出す方なり。

【五眼】 肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼、事物を觀察するに精透なる眼力。

【三種ノ身】 法身、報身、應身なり。

【福田】 善根功德の發生所となる事、田の米を生ずる如き故「功德の田」といふ義にて福田といふ、福とは功德なり。

【應供】 他の供養に應じ得る資格を備へたる大徳者といふ事、佛の十號の一。

を、「本尊問答鈔」には

問テ云ク末代惡世ノ凡夫ハ、何モノヲ以テ本尊ト定ムベキ耶答テ云ク法華經ノ題目ヲ以テ本尊トスベキ也。乃至其故ハ法華經ハ釋尊ノ父母、諸佛ノ眼目也、釋迦大日總ジテ三世十方ノ諸佛ハ、法華經ヨリ出生シタマヘリ、故ニ今能生ヲ以テ本尊ト爲ス、問フ其證據如何、答フ普賢經ニ云ク、此大乘經典ハ諸佛ノ寶藏ナリ、十方三世諸佛ノ眼目ナリ、三世ノ諸ノ如來ヲ出生スル種ナリ等云々、又云ク此方等經ハ是レ諸佛ノ眼ナリ、諸佛コレニ因テ五眼ヲ具スルコトヲ得、佛ノ三種ノ身ハ方等ヨリ生ズ、是レ大法印ニシテ涅槃海ニ印ス、此ノ如キ海中ヨリ能ク三種ノ佛清淨身ヲ生ズ、此三種ノ身ハ人天ノ福田、應供ノ中ノ最ナリ等云云、此等ノ經文ハ、佛ハ所生、法華經ハ能生、佛ハ身也、法華

經ハ神也』

と擇判せられて、諸宗が單に佛を本尊とするのと相對比して優劣を判別されてある、乃ち本門の教主釋尊を「精神的に顯はす」のが「妙法五字の中尊」であるといふことに歸着するのである。

更らに本尊の組織に就て、一層周到なる指導は

抑モ此御本尊ハ、在世五十年ノ中ニハ八年、八年ノ間ニモ涌出品ヨリ囑累品マデ、八品ニ顯レ給フナリ、サテ滅度ノ後ニハ、正法像法末法ノ中ニ、正像二千年ニハ、イマダ本門ノ本尊ト申ス名ダニモナシ、何ニ況ヤ顯ハレ給ハンチャ、又顯ハスベキ人ナシ、天台妙樂傳教等ハ、内ニハ鑑ミ給ヘドモ、故コソアルラメ言ニハ出シ給ハズ、彼ノ顏淵ガ聞キシ事意ニハサトルト雖、言ニ顯シテイハザルガ如シ、然ルニ佛滅後二千年過テ、末法ノ

【顏淵】 孔子の門人中最も勝れたる賢者、十哲の一人、名は回。

【スリカタギ】「摺型」  
木とは、一判に押し出した様に  
正確ななど俗にいふ辭に  
て、三佛の公けに定めたま  
へる本尊にして、日蓮が自  
作にはなきぞとなり。

【達多】 提婆達多なり。

始メノ五百年ニ出現セサセ給フベキ由、經文赫々タリ、天台妙  
樂等ノ解釋分明也、爰ニ日蓮イカナル不思議ニテヤ候ラン、龍  
樹天親等、天台妙樂等タニモ顯シ給ハザル大曼荼羅ヲ、末法ニ  
入テ二百餘年ノ比、ハジメテ法華弘通ノハタジルシトシテ顯シ  
奉ルナリ、是レ全ク日蓮ガ自作ニアラス、多寶塔中大牟尼世尊  
分身ノ諸佛、スリカタギタル本尊也、サレバ首題ノ五字、中央  
ニカ、リ、四大天王ハ寶塔ノ四方ニ坐シ、釋迦多寶本化ノ四菩  
薩肩ヲ並ベ、普賢文殊等舍利弗目連等座ヲ屈シ、日天月天第六  
天ノ魔王龍王阿修羅、其外不動愛染ハ南北ノ二方ニ陣ヲ取り、  
惡逆ノ達多、愚癡ノ龍女、一座ヲハリ、三千世界ノ人ノ壽命ヲ  
奪フ惡鬼タル鬼子母神十羅刹女等、加之、日本國ノ守護神タル  
天照太神八幡大菩薩、天神七代地神五代ノ神々、總ジテ大小ノ

【二界八番】 二界とは  
「欲界」と色界となり、八  
番は一に欲界天衆、二に色  
界天衆、三に龍王衆、四に  
乾闥婆衆、五に阿修羅衆、  
六に緊那羅衆、七に迦留羅  
衆、八に人王衆なり、迦留羅  
衆ハ法華經の會座に列せ  
る諸衆。

神祇等、體ノ神ツテナル、其餘ノ用ノ神豈モルベキヤ、寶塔品  
ニ云ク諸ノ大衆ヲ接シテ皆虚空ニ在ク云々、此等ノ佛菩薩大聖  
等、總ジテ序品列座ノ二界八番ノ雜衆等、一人モモレズ此御本  
尊ノ中ニ住シ給ヒ、妙法五字ノ光明ニテサレテ本有ノ尊形ト  
ナル是ヲ本尊トハ申ス也(日女鈔)  
の聖文にして、幾んど残す所なき儀軌本典ともいふべき周到の指  
南である、但しこの聖文に就ての詳細なる解釋は、別に本尊を叙  
述する拙著の中に擧げるつもりである。  
此「日女鈔」の聖判は、本尊の儀相から義分をも周説せられて、  
その義の深淵なるにも拘らず、一讀明了に本尊の大義を領するこ  
とが出来たる妙文であるから、煩を厭はずその大部分を擧げたので  
ある。







【會入】 會得悟入。

【大法印】 印は印證なり。目録理義に異り説くも佛説を通じて變るべき主眼あり。是れ法印なり。大小乘の法印あり。今に至る大乘たる實教の法印は極大なる法印といふ本經には之を「大相印」といふなり。即ち諸法實相の法門なり。

法は世に傳はつたのであるが、その佛が修行の始めは、法を定規として、それに會入したのであるから、

『諸佛ノ師トスル所ハ所謂法也』(涅槃經)

とあつて、法は佛を生み出す根元だとしてある、又

『此大乘經典ハ諸佛ノ寶藏ナリ、十方三世ノ諸佛ノ眼目ナリ、三世ノ諸ノ如來ヲ出生スル種ナリ、諸佛ハ是ニ依テ五眼ヲ具スルコトヲ得タマヘリ、佛ノ三種ノ身ハ方等ヨリ生ズ、是レ大法印ナリ、涅槃海ヲ印ス』(觀普賢經)

とも説かれてある、「方等」とは廣大平等の意義を説きたる教法即ち大乘といふことである、いかなる佛もみなこの「大乘方等經典」より出たものであるとして、修行入證の順序から、法を能生とし佛を所生としてある、今「本尊」は修行の正的として建立されたもの

だとするれば、やはり修行入證の順序の方に従はなければならぬので、本法を中尊としたので、これ即ち「法」は元と佛の「公的名稱」であるからである、又他の諸の權教方便の教で、直に佛や菩薩を本尊とする未盡理の修行組織に對し、究竟盡理なることを示すの必要もある、要するに法界萬法を統一する根本法を標榜してその内容の功德範圍を知らしむるに就て、十界三千の諸法を、この通り秩序的に具有し、調和的に具有し、向上的に具有し、活動的に具有して居るぞといふことを示したのが、左右に羅列した十界の諸尊形である、それが十が十ながら、すべて中央の妙法五字に照らされて、互に十界具融して居る姿を

秩序的具有  
調和的具有  
向上的具有  
活動的具有

といふのである、十界の界々が、既に互に具しつゝある上に、そ

十界圓具

【表裏】「法が人を生ずる」は本尊の功德によりて本法化せる「信の人」を生むなり。人が法に如ふは人の信念が往いて本尊の法に契合して、更に本尊と人の間に信と法との調和が成立す。更に本尊の功德莊嚴より理智の交通を生じ、智を發して「人が法を證する」に至りて「人が法を證する」の妙解が念力となりて、信を一層擴大し充實せしめたりて、互に表となり、互に裏となりて人法相峯くなり。

人法一如

した「大威嚴相」、「大調和體」が成佛の眞相である、本尊に對する吾人は「人」である、その人の姿はこの本尊曼荼羅の中に寫し出されてある、吾れに「地獄の心」がある點は「提婆達多」に代表されて出て居る、吾れに「餓鬼の心」があるのは「鬼子母十女」として寫し出

【本領】吾々人類の上より、總じて佛法は十界に亘るといへども、人間が本位なり、然るに善惡邪正品等大差あり、故に之を大分して邪正の二りて代表し、正は阿闍世王、邪は阿闍世王の父を弑し、母を幽閉せる惡人なり、後圓頓の教を受け、懺悔す。

眞實の我れ

されて居る、乃至吾が本領は人間であるとしても、その「邪見の分」は「阿闍世王」に依て寫され、その「正見の方」は「轉輪聖王」によりて代表されてある、乃至「佛菩薩の心」がある、それもすべて寫し出されてある、よき部分も、あしき部分も、残らず現はれて居る、たゞ現はれたのでなく、妙法功德の光りの中に現はれて居る、吾等が性靈體質の大根元たる「本法」も「それが中尊」として儼然光耀して居る、即ち我一身の本迹ともに遺憾なく顯はれて居る、我れに在ては吾が「人」と吾が「法」とが、一致融合せられて居ないのが、この大圓鏡たる「本尊」には人法一如して映つて居る、それが「眞實の我」である、今わが認めて居る「我」は、假りの我であつて眞の我ではない、その「眞の我」がこの「本尊」によりて照らし出される、この「我」こそは本佛釋尊と同體一物の「我」である、即ち「大

【妙なる我】「法妙なるが故に人我し人我き故に虚寂し」とありて、法の妙に感字せる人は、即ち「妙の人」なり。

「法界大」よりも大なる「本佛大」

なる我」「明かなる我」「正しき我」「公なる我」である、総合すれば乃ち「妙なる我」といふことに歸着する、この我を發見せんが爲めの信心修行である、その正境目的が「本尊」である。

十界己々の「小我」を没却して、「法界大」よりも一層更らに大なる「本佛大」の唯一大我に歸し萃りて、吾れ自らも氣の注かざりし「眞の我」を見出して、始めて自己の價値の絶大高妙なることを知り、區々の情念(瞋るは地獄の心、貪るは餓鬼の心、乃至、樂むは天上の心等)その儘すべて本佛化して「妙の我」となるが、「本門本尊」の力用である。

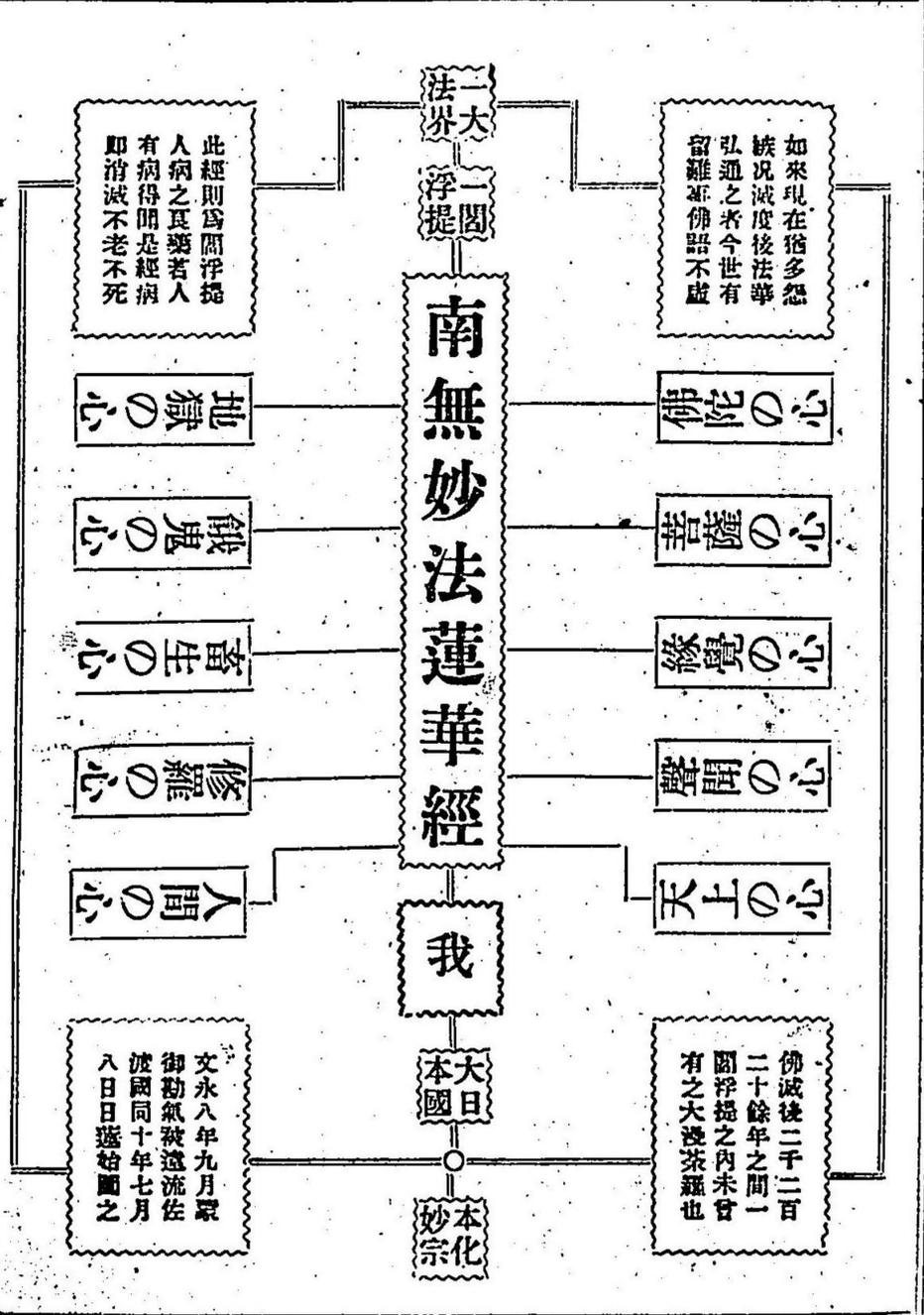
不完全なる自己が、いつまでも不完全で居る様では、本尊も修行も用を爲さない、所詮「妄我」を自覺すると同時に「本我」に還るのである、それが本尊に對する修行である。

圖解

羅列の十界は姑く心に約したるも實は身も土も俱に照らす也妙法五字の中心に照らされて悉く妙法化するを入曼荼羅といふ信を以て入ることを得べしとなり

十界の心といふは人のすべての心といふ事なり人のすべての心は即ち世間のすべてなり

「一閻浮提」とは世界中といふ事なり「日本國」とはその中心なり「我」は亦日本國の中心にして本化妙宗は亦之が原動力也





### 法界的威信

【佛印】 成佛の印といふ事、即ち成佛し得べき手形といふ意。

然るに此五字は、印度の「薩達磨芬陀利伽素多覽」を譯して「妙法蓮華經」の五字としたものであるが、語は印度語であらうと、支那語であらうと、乃至は西洋でも日本でも、爾底ことには關はない、理義正しく語調正しく譯され、ばそれでよい、今この「本化妙宗」がこの漢譯の五字を基礎として、直にこれを本佛の妙智とし、唯一佛乘種子と定めたのは、この譯者たる羅什三藏の語學上に於ける古今無等倫の學聖たる價値を認め、又支那の天台大師がこの譯語を正依として、『五重玄義』を釋成し、日本にもそれを傳へたる因縁といひ、内容事縁ともに完美して釋迦佛の原説に毫末の遺憾をも感ぜしめざる妙譯である故、直にこの譯語の上に法界的威信を公認して、『久遠本佛の妙智』明かにこの五字の中に任持包有せられたるものとして、吾人信行の佛印と定めたのである。

【無明】 不了一法界の惑といふ故、法界は元より一つものなりといふことを了知せざる惑といふことなり。一體なりといふ事に氣が注がば我れの彼のといふ隔然として明かになるなり。

前の「本尊」を「久遠本佛の正體」とすれば、この「題目」は「本佛の妙智」である、智の矢て境の的を射るのである、智の魂て境の身體は活動するのである、元來人の迷とか罪惡とかいふものは、畢竟何から來るかといふと、『天然の正智を失した諸の妄想顛倒』から來るのである、煩惱の根本惑を「無明」といふので解るであらう故に何時でも固有の正智を回復すれば、眞理は直に現前して、法界は了々分明になり、何の惑もなくなり、自在に道を樂むことが出来るのであるが、一たびこれを失ふ時は、固有の正智は容易に回復しない、しないからとて、回復せずには往かない、尋常の事では、逆も回復覺束ないが、素それを亡くしたのが迷ひ出した原因であるから、どのみち之を得て缺陥を補充せねばならぬ、扱いかにして之を得ん乎といふ段になる、こゝに於て佛の大





【名字即】四教六即位の凡夫にして始めて佛法を信ずる位。

本因を無視せる教法ありと謂はば是れ未法下種の法にあらず。本果を無視せる教法ありと謂はば是れ本佛已證の眞實乘にあらず。

名字即ノ位也

と示されて、「信」を「行因」とし、「智」を「行果」としてある。

二 本因妙行

本門三妙ていへば、「本尊」が本果妙の尅體で、本佛の妙證なることは、前にすでに述べた通り、而して此「本門の題目」が、それに對する能對で、「本因妙」の法體、即ち「妙行の尅體」となるのである。因から生じない果はない、行から出ない證はない、即ちこの「本門の題目」によつて、本尊の體中に入ることが出来る、故に「本門の題目」なき時は、「本尊」はたゞの「理窟の圖」に過ぎないものとなつてしまふ。

「本果よりは本因を宗とす」とまで訣せられた所を以て見ても、

いかに本化の宗が活動的修行的であるか判るであらう、然し因のみを取るといふのではない、「本果」の爲に益ます「本因」が要であるといふのである。

三 十界皆成ノ要法

理は本來から佛である、なにも別に「成る」に及ばない、けれども事實上吾等は墮落して居るのである、墮落はして居るが其が本領ではないから、如何しても本に歸るべく、向上還元的に發動しなければならぬ、人生の一面には常に墮落的傾向を有つて居る、それと同じく他の一面には還元向上すべき機能をも有して居る、これが一たび教行の因縁に觸れれば、『法性的本能の自覺』となつて、向上進歩して本性に還るよになつて行く、この方の勢力が

法性的本能の自覺



「向下力」即ち墮落しつ行く力。

【二乘】聲聞乘と緣覺乘、即ち小乗教の人、自己さへ悟れば、他はいかにあれ、擧げずとも、機類、個人主義の根性ある機類、故に二乘の調解脱ともいふ、依て爾前の大乗經に於て、極力之を排斥して、然るに花咲き、破れたる石が再び合うとも、二乘は佛に成れぬものと嫌はれたるが、法華經に來りて、惡人や女人の成佛を許されたと共に悉く成佛を許

增長して、彼の「向下力」に打勝つ時、信行の成効となるのである、故に本理固有の成佛の上に、必ず事實的に「破惡入理」の途を求めねばならぬ、それが「修行」といふものである、この點に於て、明かに佛に成り得べき原則及び實例を示して、その正確なることを證據立たのが、法華經顯說の諸法門である、法華經已前に於て佛に成れぬと究られた二乘や女人をも、まのあたり佛になると説き、且つそれを證明するに、一通りならざる力を入れたのは、必ずこの法華經を信じさせねばならぬ、持たせねばならぬといふ必要があつたからである、實は十界の内、あれは佛になれる、これは佛になれぬといふ筋目ならば、實際の處どれも成れないことになつて了うのである、なぜかといふと、此十界は一界で孤立して居るものは一つもなく、その本體同一のもので、互に相具し相攝して

居るのだから、若し一界でも究極佛に成れない筋のものがあるとすれば、他の九界までが側杖を喰て、結局どれも佛に成れない事に歸するのである、故に「法界の成佛」といふことになれば、一物でも漏れてはならぬ、惡人は成れぬ、女人は成れぬ、二乘は成れぬといふのは、所詮第二義點の假性をのみ認めるからの事である、一たび本體的に詮し來れば、善惡邪正その本性なく、實際の面目は、渾然として一大法性の流化であるから、この妙義の下に於て、十界は平等に成佛するのである、この道理に基りて教を布き行を立てたのが、法華本門の立行であつて、これが十界皆成の本旨である、故に「本法」は先天的に十界の本來佛たることを顯はして居る、その原理が本となつて、それを「修行」の上に移すのが「要法」といふのである、即ち「本法」の「修行化」したのが「要法」である、「十界

本法は先天的  
要法は後天的

久遠』は先天的であつて「本法」、「十界皆成」は後天的であつて「要法」といふ次第になる。

#### 四 本門壽量ノ肝心

法華の迹門が、爾前の諸經を開會するのにも、その實は後ろに「本門」を控へて居るから出来るのであつて、決して「迹門」の孤立では出来ない、「本門」を豫想せざる「迹門」は、つまり「根なし艸」のようなものである、故に一切聖教の魂たる「法華經」のそのまた魂たる「本門壽量品」は、正しく佛教の根本性命である、その「壽量品」に説かれた「三身常住一念三千」の妙理を呪し出したのが、この「妙法五字」であつて、その出所は正しく「本門壽量品」にあるから、

#### 壽量所顯

本門を豫想せざる迹門は孤立なり題目を豫想せざる本門も亦孤立也

【出所】この妙法五字を、經の名とせず、經の意とするに就て、その義の據り基く所を尋れば、法華經の中堅たる「如來壽量品」に在る「壽量品の文の底に秘し沈めたり」とも判べり。

【其筋目の人】本化の菩薩にあらずれば、善權にあらざれば、化所立てたり、別頭も然らず、ありと云ふ釋ある境界に

の妙法といふのである、而して「壽量品」でも、文上淺近の邊に約したのでなく、全く文の底に秘置かれたる秘法であつて、其筋目の大でなければ解らない、解つても説き出すことが出来ない、たとへば文上には「五百塵點の成佛」と説いてあるが、而かもその元意は「無始無終」といふことに在る、「無始無終」でなければ「三身常住」は顯はれない、「三身常住」なるが故に、「國土も常住」となる、こゝに於て「事圓の一念三千」といふことが顯はれて来る、これ等はすべて「文底の玄秘」である、「觀心本尊鈔」にも、文底を挑げ釋して「五百塵點乃至所顯ノ三身ニシテ無始ノ古佛ナリ」とあつて、文上は「五百塵點」と、有限式の數量で説いたが、その「五百塵點」なるもの、歸着は、つまり無限性の數量で、結局「無始無終」といふことになる、それを「乃至」といふた、此「乃至」は「それでもつて」といふ

【五重玄義】天台大師法華經の題目を釋するに、此の五つの玄義を以てす、これに「悲觀の五重玄」と別況の五重玄といふ事なり、妙法五字を五重玄に配すれば、妙法は名、法は體、蓮は宗、華は用、經は教、名は不可思議、體は諸法實相、宗は一乘の因果、用は斷疑生信、教は分別同異なり。

よるな意味の語である、斯くあらはに表に知れない處に、非常な幽玄な道理を含んで居るのを、正しい規則で見出したのが、玄義といふのである、即ち妙法五字に五つの深い義が籠って居る、それを「五重玄義」(名、體、宗、用、教の五つ)といふ、それが壽量の文底にひそんで居るから、之を

文底五玄

といふのである、この「文底」の玄秘たる五字の理法に、おのづから教行の二門を備へて、自然と修行の體となるようになって居る、故に此五字の『理』のある處はいつても『道』のある所で、即ち依教立行の絶えない所、隨て眞理正道の法界的原動となつて、常に道を修むるものに對する化益が絶えないのである、故に之を

教行具足

眞理正道に於ける動力

【極際】衆生法は廣し、故に本門大なり、佛法は深し、故に本門妙なり、それを一法五字の題目なり。

【攝歸和合】攝は、打て一丸とするなり、歸は信、歸正を分けるなり、和合は本佛と一如するなり。

の法といふのである。「教」とは教法、「行」とはそれを修行する方法、この二つがあつて、始めて完き宗教の用を爲すのである、いくら眞理く正道くとはかり言つても、之を行ふ動力が無ければ、『口ばかり達者で業の利かない人』のようなもので、哲學としても宗教としても、それは一種の不具體である。

即ち廣大(迹門)と深妙(本門)との極際を盡して、それを一言に約めて、「ランビキ」に掛けたように煎じつめたのが「本門の題目」で、其は那處で爾うしたかといふと「壽量品」の法門から詮し出すのであるから、『壽量の肝心たる妙法五字』といふのである、經に

父子等ノ苦惱スルコト是ノ如クナルヲ見テ、諸ノ經方ニ依テ好キ藥艸ノ色香美味皆悉ク具足セルヲ求メテ、攝歸ヒ和合シテ子ニ與ヘテ服セシム(如來壽量品)

調整約要を經たる教行

文に『擣飾和合』とあるは、即ち文底に於て、或る特種の『調整約要』を經たる要法といふことを意味して居るのである、又『是ノ好キ良藥ヲ、今留メテ此ニ在ク、汝取テ服ス可シ、差エジト憂フルコト勿レ』とある、この『留める』は即ち壽量の文底に留めるのである、これは「文底留種」といふ一科の題算である。

### 五 妙法五字ノ理義

其一……眞理ノ名

こゝで一つ「題目」に就て斷つて置く必要の條件がある、この「妙法蓮華經」といふことを、人は經典の名であるとはかり考へて、むかしから能く言ふことだが、『佛を南無と曰つて拜むのは聞えて居るが、お經！ いかにも尊いと云たところが書物ではないか、それ

眞理若し名なくんば人これを尋ねるに由なからん

何故「論語さま」と言ひ得ざりし乎

【愚説】物知りがほに理的に人法を誤解せり、學究通一あり、その愚説たるや同じ。

を佛と同じように南無妙法蓮華經といふのは、少しワザとらしくて可笑い、例へば論語は孔子の言行を集めた貴い書物であるが、孔子を尊んで「孔子さま」といふのは聞えても、「論語さま」と言つたら可笑いようなものである」と這ういふ愚説が昔から有るから、序でに一つ其妄を破つて置かう。

元來妙法蓮華經が經典の名とのみ思ふのが一つの大きな誤りである、成るほど『妙法蓮華經』と經題を下したから、經典の名とも謂はれないことはないが、今この「本化妙宗」で唱ふる所の南無妙法蓮華經は、經の名を主としたのではない、「經の意なり本體なり」を取つたのである、これを「題目」といふのは、且らく通途に従つたので、その實は法華經そのものが妙法蓮華經である、「妙法蓮華經といふことを説いた經だから、そのまゝに妙法蓮華經と名けた」

諸佛同稱の名

【説法已前】 釋迦佛の今昔利生より前に古き人過去の佛たち又は菩薩仙人迄も此妙法蓮華經の名を稱する事は「序品」の日月燈明佛、「化城喻品」の阿私仙人、「勝鬘經」の文殊師利菩薩の光瑞斯の如し是を以て知んと欲するならん」とあり

ので、之を「如來眞實經」とか、「出世本懷經」とか言はないで、直ちに「妙法蓮華經」と名けたのは、結集者（佛の滅後に經を集めて編纂した人）の考案でもなく、確かに佛の自稱に随つたので、これには必然の仕細があつて、佛みづから數々「妙法蓮華經」の名を稱したのみならず、今佛今番の説法已前より、先天的にこの名があつて、代々の佛は皆この妙法より生じ、妙法を護ることを任務とせられたのであるといふことを、また本地を顯さないうちでさへ、「諸佛同稱」の宗號なることを屢々證明されてある、況や本地が顯れた以上、「本佛證悟の至法」としての妙法たることが確められた曉は、天地を綜べ、萬古を貫いての眞理の唯一適稱であるから、是非とも『この正しき名を便つて、本理に會入すべく、天下萬世の標的となければならぬ』、名が一つ間違へば、其からそれと葛藤が生じ、

教はすべて名より始まる

疑ひやら論辯やらの花が咲いた曉でなければ、眞理の實に到達することが出来ない、そのうちには何かの躓きて、元も子も失つて了うが落だから、世を救はうといふ大慈心を有した聖人は、必ず眞理正道の標榜たる名を大切にす、『名正うして義これに随ふ』の道理であるから、名に重きを置くのである、『必や名を正さんか』とも言はれてある如く、教といふものは名から始まるのである、この呼吸を主張したものは、釋尊の外には、支那では孔子、日本では日蓮聖祖である、釋尊は、萬世の人に猶豫疑惑なく、一本鎗に眞理正法の無上道に入らしむべく、大々の露骨に、端的に、明白に、單純に、直截に、原始的に將た結論的に、一切の迂曲方便を避けて、皇々然として『無上眞理の體』を取つて名とせられたのが、此「妙法蓮華經」である、即ちイヤとも間違はれないようにしたの

である、これにて間違ふのは、間違へるものゝ悪いのである。

其二……妙法五字ノ略解

抑も「妙法蓮華經」といふことは、全體どういふことかといふと、一言に曰へば「妙なる法」といふことで、それは「蓮華」の二字で會得すべきように、一面には譬へとしての蓮華を以てこの妙法の不思議を顯はし(譬喻蓮華)、一面にはこの法界が「蓮華」といふものであるから、その法界萬法の晴れの名たる「蓮華」を以て、本性清淨の法體を顯はしたので(當體蓮華)、その道理を理義正しく萬世不變の金言とした教の典則が「經」といふので、要するに「譬喻釋」で言へば法が妙であるから「妙法」、その妙なる法は、因果不二とて、九界の衆生(因)が即佛界(果)であつて、二なく別なきものぞといふ大眞理は、恰て蓮華が花と果と同時に出來て居るのと、いくら

【晴れの名】直ちに「物といふても、意義を爲さざれども、「蓮華」と號して、始めて其因果の具名となり、且つ威嚴あり整束ある公的稱呼となるをいふ。

爲實施權

開權顯實

廢權立實

汚い水の中に在つても、天性として決してその汚れに染まないといふ工合が、この佛性の本來清淨にして、何ものにも汚し侵されない道理に譬へられ、又その花の開いたり落つたりするのが、九界の權理を逐て説かれた「權教」が、必要に際しては之を用ゐ、必要が止めば之を廢するようなもので、その華の蒼んで葉を保護して居るのを、「實の爲に權を施した」方便示現の化導に譬へ、花の開いて中の蓮實が現はれたのを、權は權として孤立すべきものでなく、元々實の爲に設けたものであるから、「その意を開けば即實である」といふ「開權顯實」の理に譬へ、蓮實がいよく成熟して下へば、花は用がすんだのだから落ちて了う、その華落ち蓮成する所を、いよく實教眞理の全部を顯はし了れば、權の存在すべき必要がなくなるから、「正直に方便を捨て、但無上道を説く」といふ「廢權

從本垂迹  
開迹顯本  
廢迹立本

立實の理に譬へたので、尙此上に更に佛の上でいへば、前の權實と同じく、菓の爲の華なることを、「本より迹を垂れた」のに譬へ、華開て蓮の現れるを九界の迹を開いて、その本地を顯はした「開迹顯本」に譬へ、又華落て蓮成するを、「廢迹立本」に譬へる、此を本迹六重の蓮華といふて、つまりは「妙法」といふことを尤も完全に言ひ顯はした譬喩である、故にこれを本體的に合點するには、この天地法界の當體が、本來清淨の徳ありて、その端嚴美妙なる大蓮華界なることを直覺して、「當體蓮華觀」に耽るべく、又整然たる理路を推し求めて、理義的に合點するには、「譬喩蓮華」を以て、比況翫味して、妙法の妙法たる所以を會得すべきである、結局いづれからしても「妙法」といふことを知るべき指南として、「蓮華」の二字を置いてあるので、凡そ何の事物たるを問はず、名稱として此

美にして威嚴  
ある名稱

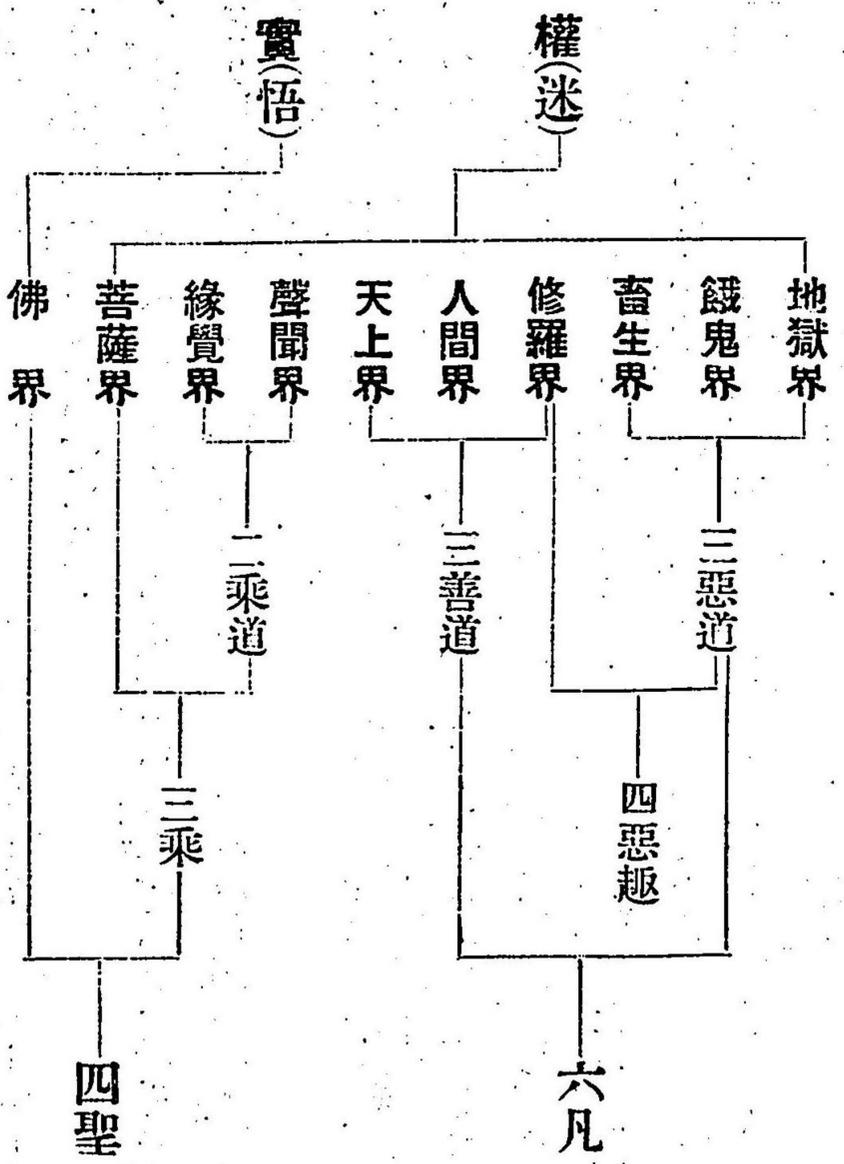
【權實の法】 十界の中  
の九界を權とし、佛界を  
實とする、分には二乘や  
菩薩にも、一分の悟や實は  
あれど、究竟の「實」は  
「悟」は佛界のみとするな

くらゐ完全した整齊した、無盡の理脈を包有した、美にして威嚴ある名稱は、外にないのである。  
「妙法五字」の指す當體はといふと、「法」の一字であつて、その法がどうしたといふと「妙」であるといふ事になるから、「法」は體で、「妙」はその心である。

さてその「法」とは何物かといふに、『十界十如權實の法』とあつて、つまり森羅萬法を指すのである、それを組織的に觀察して、迷悟の二法に約し、凡聖の二位に約し、善惡の二法に約し、その品等を周密に階別して「十法界」といふ、即ち「法則整然たる十個の境界」といふことで、略して「十界」ともいふのである。

『迷』の法、『凡夫』の法、『惡』の法、それ等は都て『權』である、究竟した『悟』や『善』や『聖』は佛界である故、九權一實とする。

- 【地獄界】 嗔りか因とす
- 【餓鬼界】 貪るを因とす
- 【畜生界】 愚癡を因とす
- 【修羅界】 嫉妬を因とす
- 【人間界】 五戒を因とす
- 【天上界】 十善を因とす
- 以上六凡
- 【聲聞界】 四諦を因とす
- 【緣覺界】 十二因縁を因とす
- 【菩薩界】 六波羅密を因とす
- 【佛界】 妙法を因とす
- 以上四聖



【十如是】 『法華經方便品』に「唯佛と佛と乃し能く諸法の實相を空盡したまへり。所謂諸法の如是相如是性乃至本末究竟等なり」とあり、「三轉」といふ讀み方あり、「是相如」「是性如」等と讀むは空觀「如是相」「如是性」等、讀むは假觀「相如是」「性如是」等、讀むは中觀也、故に宗門の風儀として「十如是」の「は、三度讀み返すなり」といふ。

件の十界中、極めて靈明な勝れた「佛界」と、極めて劣等な「地獄界」とを、善と惡との兩極として、その中間の善惡厚薄を序てて、十個の境界を分類し、それて法界のすべてを盡したのである。その十界の一つ一つに、皆それらの「もちまへ」から因縁等が、一糸紊れず存して居て、別つべき點は明白に別たれ、一體なるべき點は、本來自爾として一體になつて居る。その條然たる法則を「十如是」(略して「十如」といふて、これが十界の「一々の下に悉く具備して居る、地獄は地獄の「十如」があつて「地獄界」は出來もし存しもある、乃至佛は佛の十如があつて「佛界」は存在するのである、相性、體、力、作、因、緣、果、報、本末究竟等、この十の法は實相であるから、すべて「如是」(如是とはまぢがはぬ事)と標し、それて「十如是」といふのである。



約めて云へば體用因果に過ぎず相性體は「體」なり力作は「用」なり因縁は「因」なり果報は「果」なり本末究竟等は四に通ず

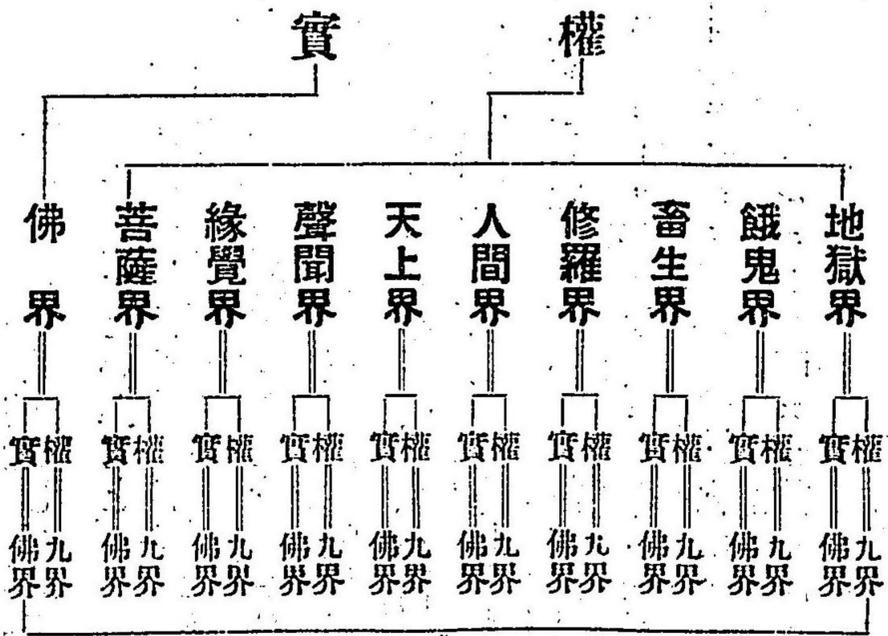
【本體】この體に付て心のみを指すと、色心の二に亘るとあり、「別行玄義」には心に同ると爲し、「止觀」は「妙玄」は色心に亘ると爲す。色心の總稱といふ方正し。

如是相…外部から見ても別ち得るもの、當相、前相の類  
 如是性…自分に備はりて動かぬもの、俗にいふ「持前」  
 如是體…主質をいふ、色心の二つを總稱していふ、本體  
 如是力…功用能力をいふ、事を爲すに足るべく備へし力  
 如是作…構造經營とも運爲建立ともいふて作業のこと  
 如是因…習因といふことにて惡心が惡業を起すの類  
 如是縁…助因といふことにて因を助くるもろくの縁由  
 如是果…習果といふことにて習因より剋獲したる結果  
 如是報…報果といふことにて習果の事實に現れたる報酬  
 如是本末究竟等…本とは初の「相」、末とは終の「報」、この本末が究竟して齟齬せざるを究竟等といふ、即ち初めの相が善ならば末も善、それが惡なれば末も惡といふ道理は一定不

動である、終始一貫して此「十如」の理法を外れることは、斷じて無いといふこと。

右の「十如是」は、法華經の法體ともいふべき法門であるから、天台大師は、是に就て四重に念釋された、一には「十界」に約し、二には「佛界」に約し、三には「離合」に約し、四には「位」に約するの四釋、いづれも肝要なれども、就中「十界」の釋はその廣きを極め、「佛界」の釋はその本領を發揮したもので、これが暗に本迹二門の高廣を示したものである、故に妙樂大師は、この四釋を「理ノ攝遍スルユトテ明スガ故ニ十界ニ約シテ釋シ、自證ノ極ヲ明スガ故ニ佛界ニ約シテ釋シ、佛ノ化用ヲ明スガ故ニ離合ニ約シテ釋シ、三徳ノ遍スルユトテ明スガ故ニ諸位ニ約シテ釋ス」といはれてある。

十界一一如權實の法を  
れが一念三千の妙組  
織なる故その法をば  
妙と稱するなり其の  
因果的關係は正しく  
蓮華の二字にて盡さ  
たりあゝ妙なる法よ  
妙法なる蓮華よ妙法  
蓮華なる修多羅よ



百 界 則 千 如

百界一々  
皆有二十如

一界に各々十界ありて百界なり  
百界の一々に皆十如ありて則ち千如となるなり

十界互具百界千如それが三種の世間に歴て三千の數となる一念三千は後に説く

### 人間本位の教

佛から言ッても吾等から言ッても、およそ道を修めるといふことは、局ッて向上進歩を意味する筈である、「踏み外せば地獄までも墮ちて行くぞ、向上すれば佛界までも昇れるぞ」といふ意氣込に由ッて、吾人の修道は力あるものとなッて居るのである、故に高い「佛界」も、卑い「地獄界」も、その迷悟善惡に於ける兩極の標準は、一ばら吾々人間の爲めに説かれたものである(教としては)、依て今人間日常の上で、直にこの十界十如の法を諦觀する時は、瞭々分明に十界を具し、十如を備へて居ることが直解されるのである、尤も『究め盡す』といふことは到底吾々凡夫には出來ないが、佛祖の指南に従ッて正しき信を起し、その信念の力より領解した分際だけでも、たしかに哲學以上倫理道學以上の『堅固明快なる安心』は立つのである、今本化聖祖の指南に依て、試みに人間を本位と

しての十界圓具を例示して見ようなれば、

古歌に  
傀儡子むねにかけた  
る玉手箱佛出さう  
と鬼を出さうと

【公正】 實は大慈悲心な  
り、菩薩の慈悲と異る、佛  
は無量の慈悲、菩薩は有限  
の慈悲なり、公正の稱は「本  
尊抄」の意を取る。



公正	慈愛	無常(二乗)	喜樂	平和	諂曲	愚癡	貪婪	瞋恚
佛界の心	菩薩界の心	緣覺界の心	聲聞界の心	人間界の心	修羅界の心	畜生界の心	餓鬼界の心	地獄界の心
(堯舜等の聖人の如き萬民に對して偏頗なき公正なる心)	(無願の惡人猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり)	(飛花落葉を觀じて無常を知り佛道を求むる心)	(佛の教に心づきて世の無常を觀じ道に入る心)	(一點の邪念なき歡喜樂天の心に十善戒を具ふ)	(善にも惡にも通ずべき平々坦々たる平和の心)	(勝他の善心を含みたる下品の善心)	(下品の五逆十惡を含めたる愚癡にして邪見の心)	(上品の五逆十惡を含めたる極めて邪見熾盛の心)

元來「如是」といふは、「爾うあるべき様にある」といふことであつて、造作虚偽を離れたる、所謂「實相」のことで、それが自ら十個の則を爲して居ることを、佛のみが究盡されたのである、この十個の天然法則が、何の境界、何の事物にも、ちやんと具つて居て、『爾うあるべきよう』に有り、『爾うなるべきよう』に成り、「地獄」でも「佛」でもおのゝ相も性も體も力作因縁果報が存して居て、諸法各々その必然の法則に保たれて、おのゝその特色を發揮して居る、こればかりは神の造つたものでもなければ、人が造つたものでもない、天然法爾として存して、自然とその中に嚴格整然たる法則が本來に具有されてあるから、その法則に含んで居る所の『道徳的性能』を取つて、人の行ふべき道と定め、その包有して居る『條理』を取つて、それを人間の則るべき原則とし、その天然法

世は生存の必要よりして生存的の道理の下に義を立て其れを善とし徳として吾人の進行點と定め其れに對て向上趨進せしむ

を意味的に解し來つたのが、佛の法理である。畢竟法理は絶對であつて、何ものからも枉げられないものとされて居る。この法に順ふものは「善」で、この法則に背くものが「惡」となつて、はじめ善惡の兩極を意味し、さてその善の部面を吾等の向上點として、これに趨歸すべく一切の思想行動を靈化して行くといふので、修行即ち眞理の體現活動が發生して來たのである。故によく此法則に順ひて、殆ど法則そのものと別物ならざるまでの境界に到つたものを、法と一體に歸したものととして、之を開覺とも成佛ともいふのである。これが佛法の原理であるから、十界を十法界ともいふ、法界とは「それ」の法則にて立つて居る境界」といふ事である。その法とは何かといへば、この「十如」の法則である、それに向上點と向上點の二作用があつて、「向下點」は善から惡に降る方、「向上

善惡二元は理の上の談道なり善惡二元は道の上の談道なり道は天性にしてその歸着が理の上趨歸する也

點」は惡から善に歸する方、この兩面の中に於て、向上點の極を佛界と爲し、向下點を九界と爲し、佛界を「悟」と立て、九界を「迷」とする、(九界の中でも菩薩などは佛に近き高位で無論下級から比べれば、多くの善と悟りを有して居るが、今は極果の佛に望めていふから、畢竟したところが迷の分齊となるのである、「九惡一善」も、矢張此例である)至極の善を佛界とし、九界を惡とする、即ち九惡一善である、この九界と佛界と相對して、九界の心を本とした法を、すべて「權」といひ、佛界を基礎とした法を「實」といふので、九界限りの法は「權理」、九界の情を酌んで、それに應同して説いた法は「權教」となるのである、その森羅萬象の固有した法則、その表も裏も一切を引き裹めて「法」といふので、「善でも惡でも」權でも實でも、つまりの行止りは、必ず本來の一致點に

【一致點】生じ來れる根  
本亦その統一となる  
故萬物みな一統歸する  
居點あり、是れ本佛なり、  
父母によりて産み出され、  
就するが如し。

妙を活動効用の上か  
ら言へば開顯となる  
開顯は妙の効用的内  
容を意味す

歸着すべきものであつて、支離滅裂に終るべきものは「法もない、その個々に具へた個々の原則も、一々に皆一大法界の原則に連れられて動いて居るので、末の方より見るから、別々のように思はれて、『法界の一體であるといふこと』が會得かねるのだが、本の方から見れば、一つもの、中にいろいろの小區別があつて、それの一小本分を發揮して居るので、畢竟その一つ一つの働きに付ては、一の大なる機關があつて、各部分を支配し、法界はその組織の下に存在して居るのであるといふことを示して、始めて善惡二法の由て在る根元が解り、『法界同一體』の覺悟が決定するから、智慧も安心も道德も、こゝに於て正確なる根據を得て、始めて大安樂地の境界に到るのである、その趣を顯すに就て、一先づ一つの法に「權」と「實」とあることを知らせんとて、權實二教を

説き、その又「實」の中に「本」と「末」とあることを知らせんとて、「本」迹二門の進退を立て、さて此權實と本迹との二門二教を始末して見せるに、「開顯」といふことを以てした、この開顯が即ち「妙」といふことである。

其三…萬法開顯ノ妙法

「妙」といふことは、事物の中に存して居る中心の眞理を發いて、その固有の本能を顯すことで、鐵を點して金と爲し、廢物を興し、冷に温を與へ、死物に生を與へて、萬物を活かすの謂ひである、法界萬有の當體は、すべて眞理であつて、悉く本佛の功德界より流れ出たものであるから、權だの妄だの惡だのといふものは一つもない筈である、然るに事物に眞妄虛實が分れ、作業に善惡邪正の別が立ち、果報に苦と樂との隔てが出来て、法界は劃然として

鐵を點して金と成すの法



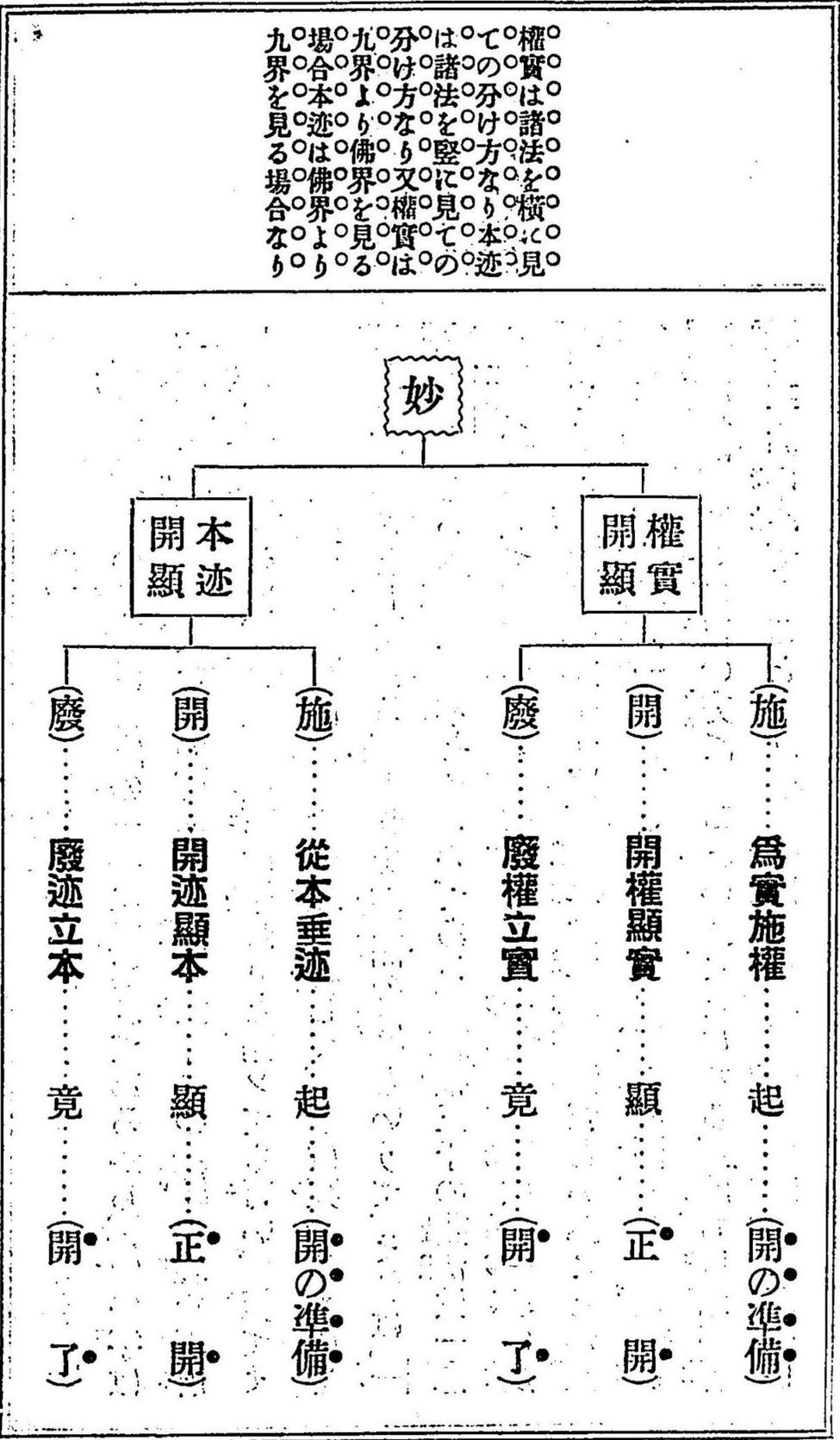
「本」悪中の「善」妄中の「眞」を發いて、その内容を見せしむるを「開」といひ、その「開」によりて眞實の顯はれたるを「顯」といひ、この開顯を「妙」といふのである。

「開」には、開の準備起と、正しく開する(顯)のと、開し終つたところ(竟)の三段あつて、それが施、開、廢、の三重となる、權實にも本迹にもある、合して六重の開顯である。

開顯のため  
一大佛教なり

概して言へば、一大佛教は一大開顯である、開顯の爲めの佛教である、一切衆生が佛であるといふことを知らせるのが、そも佛教根本の目的であるから、開顯が佛教そのものであると共に、法華經が開顯の正體なり中心なりであつて、一代佛教は正しく此開顯の準備と附屬である、故に起顯竟の三時節に攝するときは、全佛教悉く開顯の爲のものと成て了るのである。

權實は諸法を横に見ての分け方なり本迹は諸法を豎に見ての分け方なり又權實は九界より佛界を見る場合本迹は佛界より九界を見る場合なり



其四 妙ノ精義

「妙法五字」の精要は、「妙」の一字に盡されてあるから、「妙」の字は「五字」を代表した様なものである。故に深くこの「妙」の義を理解し及び味解すれば、一佛敎の能事は畢れりと謂つても可い、扱てその「妙」とは「開」の義又は「蘇生」の義と釋して、要は死せるものを活かすの義だとしてある、これを「能開の妙」というて、それは「一念三千」といふ法門を本とするのである、森羅三千の諸法は一念の發現であつて、佛界でも地獄界でも、一切の事物は皆一心の所現だといふ道理が成立すれば、法界は本來一體だといふことが決定して来る、法界同一體だとなれば、その法界の固有して居る眞理法則は、即ち自己の力であるといふことになる、即ち自己が森羅三千の中心であるとなれば、無限の權利と無限の義務とが生じ

「一念三千」法華の所證、妙法五字の所以の法門、一念三千の成佛といふ、十界のすべてが成佛するといふ道理は、この一念三千の法門ありにより、委しくは下にあり。

眞理の光明と  
佛智の電力と  
に由て開覺す

て来る、その權利は自受法樂の「涅槃」となり、その義務は平等大慧の「慈悲」となつて、法界を見ること吾身の如く一切衆生を見ること吾心の如くなるから、それを開覺とも成佛ともいふのである、即ち鐵を點して金と爲すの法、死物を活かすの謂ひである、實は鐵が金になり死物が新たに活きるのではない、「本より金なのである、本より生きて居るのである」それを例の情見の爲に鐵と爲し死物と爲したのを、眞理の光明、佛智の電力で、元の本體本質に還へしたのを成佛といふのである、この手際の眞實にして正しく、而も巧みにして圓滿なる所を具體的に「妙」といふので、「妙」の中には、「眞實」「正」「圓」「淨」「安」「即」「自在」「大」などいふ意味を、残らず含んで居て、而かもそれが言ふに言はれぬ巧妙な組織になつて、血が通つて居るので、「眞」とか「正」とかの抽象的



什譯の精確

言語では、とても言ひ顯はすことが出来ないから、之を褒美的に「妙」といふたのである。現に法護三藏は法華經を翻譯するのに、この妙(原語「薩」)を「正」と譯して正法華經とした。義理は異つて居らぬが、十分でない。羅什三藏が「妙」と譯したのは、能く法華經の經意を得て居るから、天台大師も日蓮聖祖も、特に羅什の譯した法華經を正意として宗旨を定められたのである。

眞理の血

【世間の政治】政治に根柢なきは國家の大不幸なり。眞理の國本定まらず、眞の國是立はず、法律にて國民は括られ、つゝあり、歎すべきなり。

以上の説明で、「妙」といふことの、佛教に於て最も大切なることがほゞ解つたらうとおもふ。嘗に佛教の大々的所詮なるのみならずして、今日世の中のすべての事が、この「能開の妙」といふことを離れては、まるで死物になつて了うのである。いくら眞理だの事實だのと謂つても、「血の通つて居ない眞理」では仕方がない。世間の政治でも道德でも、この萬法開顯の妙を離れては、根を斷

【人の意識】

信仰的分別なり。

たれた草木のようなもので、一時は枝葉や花が持つて居るようでも、いつか枯れて了はねばならぬ。畢竟世間の道德や理論が、「言ばに花が咲くばかりで、一向實の成らない」のはこの「妙」といふ精神を失つて居るからである。世間ばかりではない、佛教でも法華經の光りに離れた權教方便の經教を中心とした宗教は、いつれも此「根なし草」の部類である。「所開の法」は、「能開の妙」を豫想して、始めて自家の「妙」を發見するので、「法」即ち妙であつても、「妙」の意味を自覺しなければ、その「法の妙」が人間の上に顯れて來ない。自然の妙は、捨て、置ても妙なれども、人の意識に上らなければ、猫が「小判」に接したようなものである。宗教の安心のといふことは、元々人間のために必要であることを忘れてはならぬ。眞理眞理と謂つても、血の通はない眞理では役にたゝぬ。故に「眞」とい

【二の教相】前記に出せる三種教相の中の第一の根性の融不融と、第二化導の始終不始終との二列。

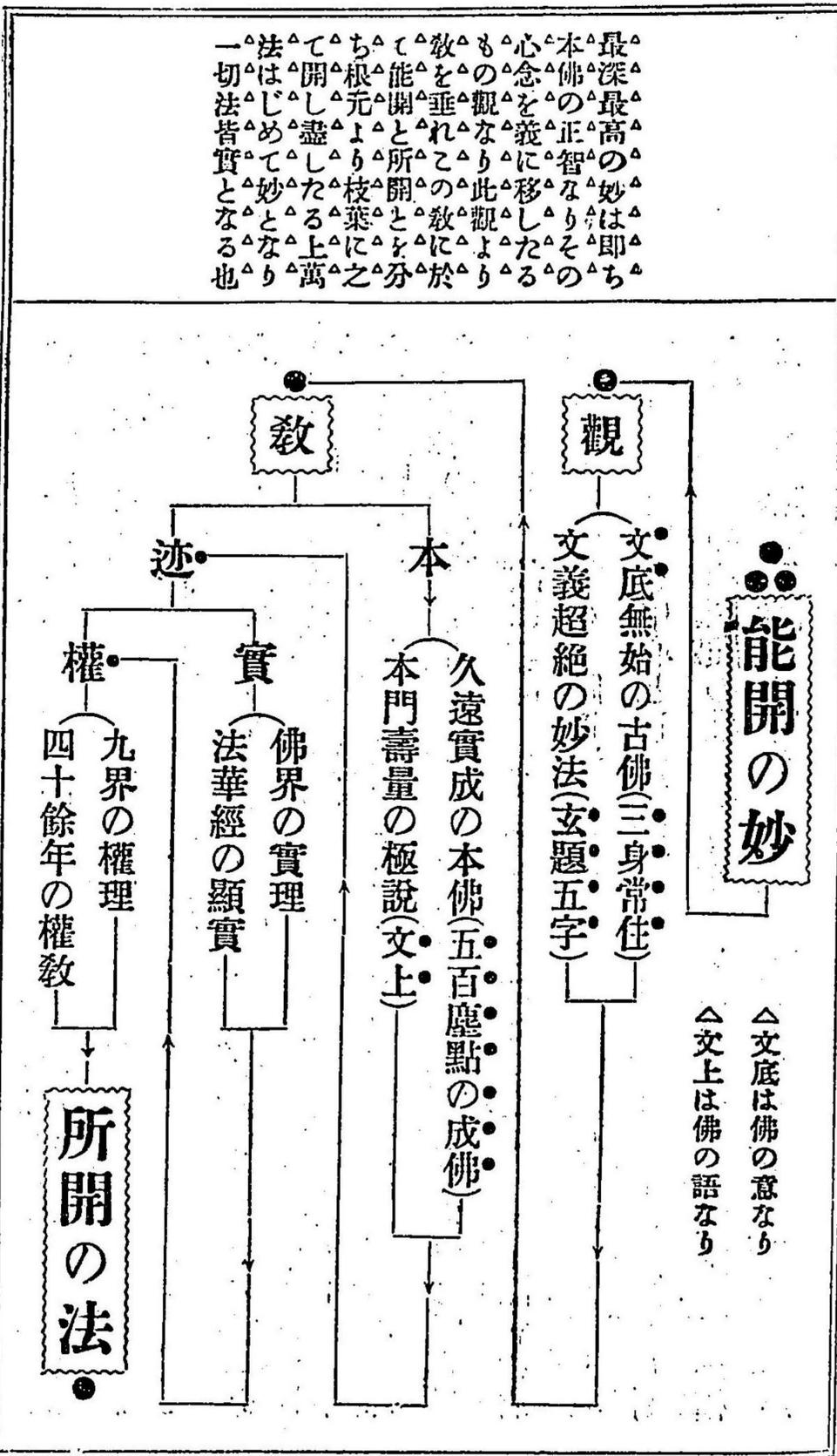
はずして「妙」といひ、「實」といはずして「妙」といひ、「正」といはずして「妙」といふたのである。即ち眞理正道の大成が「妙」である。

其五 本門開顯

「五字」の精が「妙」の一字に歸着するとなつて、扱て其「妙」の功能はといふと、「開顯」に在る。而してその「開顯」は迹門の立場でなく、必ず「本門の開顯」でなくてはならぬ。

所謂「二の教相は、世間にも夢の如く言ふものあれど、第三の法門に至りては全く沙汰がない」と名乗つて、本化獨特の判教を發揮された、彼の有名なる「第二の法門」は、全くこの「本門開顯」の一意に正據したものである。迹門は爾前教を開しても、本門からは開せらるゝ地位で、本門のみは「萬能開」である。而して此に又文上文底の別がある。

最深最高の妙は即ち本佛の正智なりその心を義に移したるもの觀なり此觀より教を垂れこの教に於て能開と所開とを分ち根元より枝葉に之を開し盡したる上萬法はじめて妙となり一切法皆實となる也



### 法門の相場

この「文底」といふのが、本門壽量品の文の精神を取った、妙法五字といふことで、即ち「妙宗」で唱ふる「題目」のことである。これが「萬法能開の妙」としての究極したもので、これから見ると、「文上本門」も獨開せらるゝ「所開」である。況や「迹門」況や「權教」をやて、但「本門」が上は「題目」を生み、下は「迹門」「已下の諸法を開するが故に、法門の相場は、すべて「本門」で立てるのである。即ち「西陣の錦とか伊丹の清酒とか産地を以て品物の精良を證する」の格である。故に「本門の開顯」といふことを以て、法華開會の眉目とするのである。同じ法華經でも、この本門の理義を主としないうて、只迹門を中心とした開顯では、自己より已下の「權教」に對した場合にのみ開顯の權能があるようだが、その「能開の妙」が横だけで、豎に行渡つて居ないから、つまり不完全である。「十界が

【天台宗】天台大師と天台宗とは全く別物なり、今日天台宗は慈覺智證の天台宗にして、傳教大師の天台宗を、日蓮上人は教山を指して「濁れる山なり」と別

皆佛性を具へて居る』とだけは明かしたが、未だ佛の本地を顯はさないから、その説く所の佛性そのものが猶不明確である。「品物は手に入つたが、所有權が移つて居ない」といふような鹽梅で、「實」として「權」に對した資格は、正に能開の主權を有したようだが、後の「本門」に對うと、やはり所開の地に立つて、「本門」から開せられねばならぬ。結局半分の珠を獲たのであつて、完全なる「妙」といふわけに行かない。天台宗も法華經を奉じて居るのではあるが、その法華經は、「迹門」を主眼としての法華經であるから、具體的に法華經の勝能を發揮することが出来ない、それゆゑ「題目」も唱へたり、「念佛」も申したり、「禪」も「眞言」もと、いろいろなものを寄せ集めて、「猿虎蛇」のような法華經を造り上げて、自らも其正確の中心を認め得ないような光景になつて居る。弘法大師に、「第三

第三戲論を言解くの辭なし

【開會】開顯の事なり、會は諸の義相を同じものとする事と「あつめる」の意なり。

【絶對開】萬法の何ものからも開し得て、自己は何物からも開せられぬ、無上の開顯能力。

【直命】餘人の手を借らず、何人に知らせず、直接に大法を付囑せる致命。

戲論」といはれても、一寸は辯解が出来かねる様な工合である。

今この本化妙宗の「能開の妙」は、立脚地が「本門」にあつて、歸着が妙法五字の玄題にある故、極度の最勝點に立つたもので、唯萬法の何ものに對つても、「開會」の權能を有して居つて、自らはどこからも開せられない、「絶待開」の無上法である、而してこの「本門開顯」の理義は、「本門」を中心として法華經を解するから來るのて、「本門」を中心とすることは、「本化の菩薩」に限る、迹化の論師人師は、決してその分でない、畢竟龍樹菩薩や天台大師のような教傑が、この「本門開顯」を自己の主張としなかつたのは、能く時節を辨へ本分を守つたので、これは末法濁惡の時代に到らねば、説き顯はすことの出來ぬ法となつて居て、その時代になると「本佛の直命」として、「本化」が出現し、此「本門開顯」の妙義を以て、極

○大○佛○教○よ○り○若○し○本○化○の○善○薩○を○除○き○去○ら○ば○殘○る○も○の○は○黃○卷○赤○軸○と○文○字○耳○第○三○戲○論○と○も○捨○閉○開○抛○と○も○閉○文字○と○も○評○し○得○べし

惡の時代を救ふことに、釋尊みづから法華經に規定せられてある、要は大重病には大良薬でなくてはならぬといふ、佛の大慈念が、特に末法五濁極惡深重の世を救ふために、此法華經を説き残して、その人までも撰定して置かれたのであるから、「本化」の手を透して傳へ顯された法華經でなければ、眞の法華經でない、佛敎全體の取捨進退も、一に法華經の上に存して居るから、本化の一言一動が、全佛敎の中心である、佛敎に於ての此上もない問題はといへば、「本化の菩薩の出現」といふことに在る、而してその出現が二度だ、一度は佛在世、一度は末法の時代である、若し佛敎を信ずるとか研究するとかいふものがあつたら、先づ第一に此事からして究めて掛らねばならぬ所の大問題である。

本化の菩薩によりて、先づ此日本國に弘められた「本門の題目」

「題目」に就て、二三の聖判を擧げ示さば、先づ末法の時に於て特に本化上行によりて弘めらるべきものなることを

は、正しく法界萬法の開顯法として、「本尊」と「戒壇」とに照應一具して、時と國と機との一大相應を得て建立せられ、釋尊、法華經、世界、日本國、人生、の一切を解決して餘す所なき一大至法であることを知らねばならぬ。  
萬法を開顯點晴して、その死を活かし、その闇を破り、一切の道法理義を根帯より妙化すべき本門の題目は、眞理正道の實力を標示すべき左券として發行せられた「約束手形」である、故にこの五字の律法的規道を無視しては、よろづ名義實質の齟齬を來して、理義葛藤の種となる基であるから、佛陀も祖師もヒドク名といふことに重きを置いたのである、而して其やんごとなき名それ直に眞理の體である、佛智の實である故、特に「題目」と「票榜」したのである。

前代二異ナリ、自行化也、名目宗用妙法、五重玄經也、也(三大秘法抄) 付囑の異れる趣を

題目の理體に就て 入切華上病藥文小等末樂經王スニ經薩殊ヨヲ迦ハ、

又「題目」の法體に 就ては 日本ノ二六十六國ノ人

又題目に就ての攝 機宏大にして一閻

抄(無日王ナレカ池薪ハチ南百間此ハニ日ハニ初機花メケ

### 本門の戒壇

## 第十七章 三秘各論ノ三「本門ノ戒壇」

### 一 久遠本佛ノ妙相

眞善美の至極  
せる事實相  
【建立】物の出来上りて  
存在を持續せる事。

「本門の戒壇」は、全く本尊と題目との立行的に相應せる「事の成  
佛の姿」を明かした法門である、妙法を信じ唱へて妙法に歸依し  
た姿は、正しく法界の極眞極善極美の事實相にして、これ即ち「久  
遠本佛の妙相」である、總じて世界でも人類でも一切の建立は、み  
な「戒律の表現」としてある、一切の善意好意によりて事物のまと  
まること、出来上ることは、すべて「戒の結果である」としてある、  
山の静かなる姿、水の活動する姿、松竹の勁節ある、花卉の艶麗  
なる、是みな或る善意の表象である、男女の容貌端麗なるは、過  
去に功德を積んだ餘慶の結果だとすれば、人相醜劣なるは、過去

悪の姿  
善の姿

【潰瘍】その局部がうみ  
てくづれる症。

に於て悪いことをしたからとなる、要するに物の破壊せらるゝ姿  
は悪の姿で、建立せられ整正せらるゝ姿は、すべて善の姿である、  
自然界でも「きままり」に背けば破壊の相を爲すに究つて居る、風雨  
水火が常道を失つた場合に、地震や噴火や洪水があつて、その常  
態を破壊する、人の身體でも、營養攝生の常規を失した場合に、  
逆上だの下痢だの出血だの潰瘍だのといふ變が起つて、有形無形  
に身體の組織を破壊するものである、故に事物すべてその常を持  
つのは、「きままり」に順ふからで、一朝この「きままり」に違くと潰れ出  
す、その所謂「きままり」とは「戒」の原素である、たとへば動物がす  
べて生を愛し死を厭ふの情があるから、この「きままり」を本として  
「生物を殺すな」といふ「不殺生戒」を制したようなもので、日月の  
運行、春夏秋冬の替化、いつまで行つてもキチンとして一定の規

【替化】春の後に夏來  
り夏より秋、秋より冬と  
うつり替る時節の變化。







【宗奉】 宗旨として尊信する事は、一乘妙法に限る、若し學問眞理として解説應用することば、外道をも即佛法なりと會す、況や大乘小乘の佛説をや。

ば子として親を顧みないといふ者があつたら、すでに「不孝」である、日本國民として吾國の天皇を敬はないといふ者があつたら、それは既に「叛逆」である、是等は君父に害を加へたのでなくとも、既に逆罪である、それと同じことで、必ず持たねばならぬ善の法を持たないといふのは、すでに「謗法」である、又唯一なるべき君父を二三にするが如きは、これまた一種の逆である、「天に二日なく國に二王なし」唯一尊貴を、二つも三つも並べるといふことは、たしかに「逆」即ち「謗法」である、故に「宗として奉すべきものは、但だ法華經の「一つ」でなければならぬ、(宗奉以外に哲理學說の立場で用ゐるのは別である)、久遠劫の昔より、この法に遠離つたり、又は混物をしたりの過失で、今に至るまでも還元歸眞することが出來ずに居るのである、それを此たび幸にして此唯一獨

【前車の覆轍】 前に行ける車が覆るやとを、見たり、後の車が用心するを、見たり、根元「不正純」の法を信じて「生一本」の佛法に依るなり。

個人△の△佛△相△  
國家△の△佛△相△  
世界△の△佛△相△  
法界△の△佛△相△

尊の正法に値遇したのだから、今度こそは、何でも間違はないよりに、確乎と正式に持たねばならぬといふ必要から、前車の覆轍に懲りて、「生一本の純正眞理に歸依して、その正しき光に浴すべく堅く誓はうぞ」と約束するのが、「謗法」を嚴禁するの戒である。扱かくして「謗法」は防止する、「大善正法」は持つ、この事業相状は、たしかに久遠本佛の姿をうつしたものである、「本尊」が本佛の正體で、「題目」が本佛の妙智であるから、この「戒壇」は本佛の妙相である、これが個人に在る時は、その個人が本佛の相を現じたのであるし、之が國家に在れば、その國家が本佛の相を現じたのである、これが世界全體に爾うなれば、世界はこゝに本佛の妙相を成就したのである、而して天地法界は、任運自然に常に恒にこの本佛の相を現じつゝあるのである。

### 一 本國土妙

國土は事業の  
根據にして果  
報の發現なり  
【依地】その依り住して  
居る所。

「本門三妙」の中では、この「戒壇」は正に「本國土妙」にあたるのである、元來國土は『事業の根據で、亦果報の發現』である、所謂依地を以て内容を表證するのである、たとへば金殿玉樓を見て、その住むもの、王侯貴人なることを知り、山林田畝の整頓し水利土工の完全した町村を見て、その住民の聰明善良なるを察するが如きもので、佛の果報に伴っては、必ず佛の淨土が説かれてある、然るに方便權教には、佛の淨土といふものは、遠い、別の處に在るものとして、吾人の住んで居るこの世界をば、穢土として嫌ッてある、故に佛といふも凡夫の外に在り、淨土といふも此土の外に在るものと考へられて居たのが、法華經本門壽量品に至て、

【娑婆】こゝには「忍土」と譯す、又は「缺減」ともいふ、よるつ缺損して自由なる所といふ意、堪忍せざるに居られぬ所といふ意、俗に「忍土」といふなり、俗に「苦の娑婆」などいふもこの故なり。

『佛の顯本』といふことがあつて、今の釋迦佛は、今度初めて人間から佛に成たのでなく、『久遠の大昔よりの佛である』といふことが顯はれると共に、佛の淨土は外の處でなく、やはりこの娑婆世界である、これが穢土と見えるのは、凡夫の顛倒からである、即ち

『阿僧祇劫ニ於テ、常ニ靈鷲山及ビ餘ノ諸ノ住處ニ在リ、衆生劫盡キテ大火ニ燒カル、ト見ル時モ我ガ此土ハ安穩ニシテ天人常ニ充滿セリ』(如來壽量品)

と説かれて、同じ娑婆であつて、衆生の見るのと、佛の見るのと違ふとされてある、たとへば心に哀みを懷くものは、何を見ても悲しく見え、心に樂みあるものは、天地萬物何を見ても面白く見えるようなものである。

果報の表彰點  
事業の積聚點

【嚴淨】嚴は嚴美にて相照せる立派の所爲にてこの佛土を「かざり」きよめる事。

然るに一たびこの妙法を信じて、如法に歸依立行するものは、その人の精神色體、すでに本佛の靈光内に還元したのであるから、その人の住所さながら「常寂光」となるのである、その人の果報の表彰點たる「依地」が、斯く淨土となる上は、その事業の積聚點たる「國家」も、隨て靈化せらるべきものである、又心ず國家を嚴淨しなければならぬ筈である、「國」とともに成佛するにあらざれば、まことの自己の成佛でない」と説くのが、「本化妙宗の即身成佛である、今この「本門戒壇」の法門は、この本門の妙談「本國土妙」の原理を實現して、國家の結合力とその發展力とを淨化し靈化して、これを「妙法弘布の原動力」とするの大意匠を以て建立されたのである。

天地法界に固有法爾の約束のあるが如く、人にも必然性の約束

「教權」の精華これを「戒」といふ戒と一致せる國にして始めて眞理の實現境となる即是れ眞理の國なりてまた信仰の國なり

がある、それが「戒」の基礎である、而して人の約束の到り極つたものは「國の約束」である、即ち國の建創、存在、持續、發展、それらの力は、すべて個人の力の集中し發動したものである、故人をして正道に入らしめねばならぬ通り、國をして正道に従はしめねばならぬ、これを確かにしないと、少々ぐらゐ對人的に感化を試みても、「こちらを積めばあちらが頹れ、此處を直せば彼處が曲る」といふように、いくら行つても同じこと、いつまで経つても一つこと、要するに萬代不朽萬方同歸の實を擧げることが出来ない、依て是非とも之を確實にしようといふには、人々の約束の總合點たる「國家」そのものを同化しなければならぬといふ處から、こゝに「戒法」といふ一定標準を「教權的に建設して、それを國家の主權と結び付ける」の必要を生じた、其が「本門の戒壇」で

ある、故に

【有徳王】乃往過去に有徳王といふ聖王あり、その時に覺徳比丘といふ人、正法を弘めたるに、諸の邪人は覺徳に歸依し、兵力を以て邪徒を防ぎ、正法正師を保護せりといふ『涅槃經』の往事説。

【事ノ戒法】理戒にあらずる事相の戒法といふこと。

【一閻浮提】須彌の四洲の一、南閻浮提の事、即ち吾等の棲息せる今の全世界。

【大梵】大梵天王はこの娑婆世界を造り且つ主宰する神。

【帝釋】初利天に居し梵天の重臣として世界を監視する神。

「戒壇トハ、王法佛法ニ冥シ、佛法王法ニ合シテ、王臣一同ニ三秘密ノ法ヲ持チテ、有徳王覺徳比丘ノ其乃往テ未法濁惡ノ未來ニ移サン時、勅宣竝ニ御教書ヲ申シ下シテ、靈山淨土ニ似テ、最勝ノ地ヲ尋ネテ、戒壇ヲ建立ス可キ者歟、時ヲ待ツ可キ耳、事ノ戒法ト申スハ是也、三國竝ニ一閻浮提ノ人懺悔滅罪ノ戒法ノミナラズ、大梵天王帝釋等モ來下シテ蹋ミ給フベキ戒壇也。(三大秘法抄)」

と説破されて、一國同歸の上で、その國力を以てこの法を保護するのが、人類に臨むの第一要義であるとせられた、それが原理的本國土妙を、事實の上に現はしたのである、即ち理談を事實で解決したといふことになる。

### 三 身土色心ノ妙化

「戒壇」は無論國家の上の法門であるが、前にもいふ通り、「個人を積んで國家の保護力とする」のであるから、之を個人の上に約して見れば、先づ「個人に含まれた國家」および「それを含んだ個人」のいづれをも妙化するのである、それが「身土色心の妙化」といふので、「身」と「土」とは「依報」と「正報」の關係で切っても切れない、又「色」と「心」とも互に相依り相持して毫も離れられない、故に自身の成佛が國の上にも顯はれ、國の成佛が自身の上に影響し、心の成佛は身を證し、身の成佛は心の成佛を證するといふように、身土色心互に相融し相照らして一つになつて、而かも同一靈化を受け、「本因」「本果」「本國土」の三妙が一時に現前する姿を、

【妙化】化して微妙なるものと爲すの義。

【身土色心】身土とは正報の身とその身の依止する所の依報の國土、色心とは身と心との事、「色」とは身なり、佛法にては色じて色實とて「かたち」あるものを「色」といふなり。